

琉球大学学術リポジトリ

神宮文庫本『狭衣』翻刻(巻一)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩野, 敦子, Hagino, Atsuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/908

神宮文庫本『狹衣』翻刻（巻一）

萩野敦子

はじめに

『狹衣物語』の一伝本たる神宮文庫本は、中世末期から近世初期にかけての書写とみられる四巻四冊の完本である。その本文は諸伝本の要素を取り入れた混態的性格が著しいが、それゆえ『狹衣物語』の流布・享受の一様相を知るうえでの貴重な資料といえる。本稿をその翻刻紹介の第一回とし、引き続き本紀要に連載する（全五回）予定である。なお、貴重な写本の翻刻公開をお許しくださった神宮文庫関係者の方々に、記して感謝申し上げる。

凡例

一、本稿は、神宮文庫蔵『狹衣』全四冊（いわゆる『狹衣物語』全四巻）のうち、巻一（原本では一冊印。表紙には『狹衣 上』とある）を翻刻したものである。

二、紙幅の関係で原本どおりの行取りにはせず、迫い込みで翻字した。和歌に関しては、原本の体裁と同様二字下げとし、後続の散文は行替えせずに続けた。ただし和歌が二首続く場合には、原本と同様に二首とも二字下げで前後の行から独立させて示した。

三、原本で本文の開始となる丁を第一丁とし、各丁表・裏（略称オ・ウ）の区切りごとに、（一オ）以下の印をつけた。いじまでが第一丁表に相当するという意味である。

四、翻刻にあたっては、現行の正字体を用いた。また、原本に存在する各種の書き込みを再現するにあたり、便宜上次のような記号を用い

た。

- ① 見せ消し部分には傍線を引き、訂正本文がある場合には（）を付して記す。
 - ② 補入文字については□で囲む。
 - ③ 異文注記については、注記の対象となる本文のあとに《》を付して記す。
- 五、明らかな誤字誤写とみられる場合でも特に「ママ」等の注記をほどこさず、原本に忠実に翻刻することとした。

神宮文庫本『狹衣』（巻一）

狹衣 上（表紙）
白紙（見返し）

少ねんの春はおしめともどまらぬものなりければやよひの廿日あまりにもなりぬ御まへの木たちなにとなくあをみわたりてこくらきなに中しまのふちはまつにとのみもおもはすさきかゝりて山ほどゝきすまちかほなるにいけのみきはのやへ山吹はるてのわたりにこならすみわたさるゝをひかるけんしの身もなげつへきとの給けんもかくやなとひとりみたまふもあかねはさふらじわらはのをかしけなるして一えたおらせ給てけんしの宮の御かたにてもまぐりたまへり御まへには中なこん中将やうの人々さふらひてみやは御てならひゑなとかきすさひてそふさせ（一オ）給へるにこの花のゆふはへこそつねよりもをかしうみえ侍れ春宮のさかか

りにはかならずみせよとの給はするものをいかで御らんせさせてしかな
とてうちをき給ふを富すこしおきあかりてみをこせたまへる御つらつき
まみのうつくしさは花のにはひふちのしなひにもこよなくまさりてみえ
給をれいのむねうちさはきてつくへとまほらせ給に花こそ春のとどり
わきて山吹をてまさくりにしたまへる御てつきいとゝもてはやされてい
ひしらすうつくしけなるを人めもしらす我身にひきそへまほしくおほゆ
るさまぞいみしきやくちなにしもさきそめけんちき（一ウ）りそく
ちおしき心のうちいかにくるしかるらんとのたまへは中なこんの君さる
はこののはおほく待るものと云ふ

いかにせむいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人そなきとおもひ
つゝけられ給へとけに人もしらさりけりたつをたまきのどうちなけかれ
てもやのはしらによりゐ給へる御かたちそ猶たゞひなく見え給によしな
きことだよりさはかりの御身をむろのやしまとのみおもひこかれ給そ
いと心くるしきやさるはこのけぶりのたゞすまひしらせたてまつらんこ
ともをよひなくいかならんたよりにてなとおほしわづらふには（2オ）
あらすたゞふたはより轡はかりのへたでなくおひたち給ておやたちをは
しめよその人々みかと春宮などもひとついもせとおほしめしをきてたる
をわれはわれとかゝる心のつきそめておもひわひつのめかしてもかひな
かるべきものからあはれに思ひかはし給へるにおもはすなる心のあり
けるよとおほしうとまれこそせめ大殿宮などもたくひなき御心さしとい
ひながらこの御ことはさらはさてあれかしとはよにまかせ給はしよそ
の人のきゝおもはむもゆかしけなくけしからすもあるへきかなゝととさ
まかうさまで世のもときになりぬへきことなれはあるましきことふか
く（2ウ）おほしとるにもあやだくに心のうちはくたけまさりつゝけ
にいかなるさまにかつるには身をもなしはてんと心ほそくおほざるへし
いまはしめたることにはあらねともなを世中にさらても有ぬへかりける

ことはあまりよろづすぐれ給へらん女の御あたりにはまことの御せうと
ならざらんおとこはいみしうともむつましうはおほしたて給ふましきわ
さなりけれどはやうはなすみのしゝうさじ中将などやうのためしともゝ
なくやはまししてこれはことはりそかしいはけなくより人にもにすめてた
き御ありさまをやうへものゝ心しり給まゝにかゝらん人をこそわかも
にはせめこれに（3オ）をとりたらん人をはみしとのみおほししみ
にければとかく人を見あつめ給まゝにとかくしもつくりをきゝこえけ
んむすぶの神さへうらめしくそおほざるゝこのころほりかわのおとゝと
きこえさせてくわんはくしたまぶは一条院たうたいなどの御ひとつきさ
いはらの二のみこそかしはゝきさきも打つゝきみかとの御すちにていつ
かたにつけてもをしなへておなしみこときゝえさするにもいとかたしけ
なき御身のほとなれとなにのつみにかたゝ人になり給にけれと故院の御
ゆいこんのまゝにうちかはりみかとたゞこの御心によをまかせきこえ給
て御なかなともあらまほし（3ウ）うめてたき御有さまともなり二て
うほりかわのわたりを四まちつきこめて三がたにへたてつゝべりみかゝ
せ給へるたまのうてなに北のかた三人をそすませたてまつり給ひけるほ
りかは二ちやうにはやかて御ゆかりはなれぬこせんたいの御いもうと前
斎宮おはしますどうるんにはたゞいまのおほき大とのときこえさする御
むすめ一条院のきさこの宮の御をとうと春宮の御をはよ世のおほえうち
くの御ありさまはなやかにたのもしけなりはうもんにはしきふきやう
の宮ときこえさせし御むすめそなかには心ほそけなる御ありさまなるへ
けれど女君のよにしらすめてた（4オ）き一とこくうみたてまつり給
へりけるをうちだましらせたてまつり給てこのいろ中宮ときこえさす今
上ののみこきへいておはしましたる御いきほひなかくすくれてめて
たく行すゑまでたのもしき御有さまをついたをへたてつゝかよひて殿は
みたてまつり給かゝる御なかにも斎宮はおやさまにあつかり給てしかは

やん」となくかたしけなきかたも御かたちありさまをはしめて心さまもなへてならずおもひきこえさせ給へる御かたにしもかくすぐれてこの世のものとも見え給はぬおとこ君さへたゝ一人ものし給をいかてか世のつねにおもひ（4ウ）「きこえさせ給はんあまたものしたまはんにてたにいとかへらんはおやの御心ちにもいかてかすぐれておぼしかしつかさらんど見えたりこのころ御とし廿にいま二はかりやたり給はさらん二の中将とそき」ゆめるなへての人たにかはりにては中なこんにもなり給へきそかしされともこの御有さまのよつこの世の物ともみえたまはぬよしさにおぼしおちて御心にもまかせきこえ給はぬなるへしこれをたには、宮はちこのやうなるものとあへかにまへしきまでおぼしためれとをしなへての殿上人のやうま（に）てましらひ給はんか心くるしさにうちのうへ（5オ）のせちになさせ給へるなるへしたい十六かさかむに仏とりこの世のひかりのためとけにあやうきものにおもひきこえさせ給へぬることはりなりやたゝうちみるよその人たに我身のうへをもわすれ思ふことなき心ちすれはまいて大殿なとはあめかせのあらきにも月日のひかりのさやかなるにあたり給ふもいまへしくゆへしき物におもひきこえたまひつゝおぼふはかりの袖のひとまなくあまりこちたき御もてなしもをうきはたのまれぬへくるしくおぼさるゝおりもあるへしされとさのみもいかてかはしたかひきこえ給はんよるなどをのつからまぎれ給（5ウ）「夜なくはふた所なからうちもまとうますうしろめたき」とをなげきあかさせ給へとむかひきこえさせたまひぬれは思ふまゝにもせいしの給はてたゞうちゑみつゝみたてまつり給へるけしきともいひしらすあはれけなり見くるしくあるましき」とをじいて給ともこの御こゝろにすこしにてもくるしうおぼしぬへからんことをはたかへきこえさせ給へうもあらすゆめはかりもあはれをかけ給はん人をはいひしらぬしらぬめなりともたまうてなにはぐくがんことをおぼしをきつれといかな

ることにか御身のほどよりもひみじくしつまりて」の世ばかりそめにあち（6オ）「きなき物とおぼしてありてふ人はしらまほしく（け）にもおぼしたらすおぼろけならすさらんことは御めもみゝもとゝめ給へうもあらねはすこしものすさましう心もやましき御けしきなるをくちおしく心もとなき物におもひきこゆる人々もあるへしさるはまれくひとくたりもかきなし給みつくのあとも猶めつらしくをきかたき物に思ひかことはかりのゆくてのなさけをも身にしみてをかしういみしとこゝろをつくしまいてちかきほとの御けはひなとはちよを一夜になさまほしくとりの音つゝきあかつきのわかれにきえかへりいりぬる（6ウ）「そのなかくなるなけきをひるよなく心をつくす人々たかきもいやしきもをのつからいかてかなからんそれにつけてはいとこうらみ所なくすさましさのみまさり給へかめれといとなへてならぬあたりにはなたらかになさけを見せ給ひておりにあひたる花もみちしも雪雨かせのあらきまぎれもしほはれまさりぬへき夕くれあかつきのしきのはかせにつけておもひかけぬほどにさすかにいつぐにもをとつれ給ことはたえすかけろふにをとらぬおりくにつけては中へ心をまとはしていなふちのたきまさりていそぶりに心をつくし給なめりかしさこそまめ（7オ）「たち給へと猶このあくせにむまれ給へはにやたゞひきすき給みちのたよりにもすこしゆへつきたる山かつのかきぼのなてしこはをのつからめとまらぬにしもあらぬほどにのをなつかしみたひねし給あたりもあるにやいかなるおりにかほんわう經に一けんを女人との給へることをおぼしいつればくるまのすたれうちをろしつれとそのはひろくあきたるをはえたてたまはぬなめりかしさてたにいかてかおはせさらんおとことぶものはあやしきたにもみのほともしらすいかなるものゆかしかりせぬものはなき世のさかなりければまひてひかりかゝやき給御かたちをはさ（7ウ）「るものにて御心はへあことじしき御ねえなどはもいしにやたくひもあひん」

の世にはいまもむかしもためしなくそものし給ひけるてなどかき給さま
もいにしへのなたかかりける人々のあとは千とせふれともかはらぬに見
あはせ給へはなをときにしたかふわさにやいまめかしくたをやかになつ
かしくうつくしきさまはこよなくかきまし給へりとそさだめられ給める
又ことぶえの音につけても雲井の（を）ひゝかしこの世のほかますみ
のほりてあめつちをうこかし給つべきをいとあまりゆゝしくおほしてお
やたちせじしきこえ給てなにことをもあ（8オ）なかちにこのみせさ
せたてまつり給はねはわれも心とゝめて人にみゝならし給はすなどあれ
はよろつにむしむにものすさましき人さまにやとをしはかられたまへと
すこしきはらうたひ經なとよみ給へるはきかまほしくめてたし何事も
たてゝならひ給こともなしこの御師となるべき人もなけれどたゝいかに
したまへるにかめつらしくためしなき御さまけしきなとは打みたてまつ
るより御かたち身のさえなとも御としのほとにもすきてまひてさかりに
ねひとゝのひ給はんゆくすゑゆかしくあまりなるわさかなとおどろきあ
さみこ（8ウ）のよのひかりのためにあみた仏のかりそめにいて給へ
るにやといひしらぬしつのおなともみたてまつりてはわから身のうれへも
わすれてあさましけなるかほのゆくもしらすゑみひろこりあるはをか
みたてまつりてなみたをなかしてよの人のことくさにきこえさせられと
大とのなとはあまりゆゝしくあめわかみこのあまくたり給へるにやとけ
ふやあまのはこもむかへにえたまんとあやうくしつ心なき御心のう
ちともなりけんしの宮ときゆるはこせんたいの御すゑの世に中なこん
の宮す所ときこえ給し御はらにたくひなくうつくしき（9オ）女宮の
むまれ給へりしをいまさらのほたしと心ぐるしくおほしはくゝみしほと
に宮の三つに成給ひしに院もはゝ宮す所もうちつゝきかくられさせ給ひし
かはふとゝへろぐるしうて齋宮やがてむかへとりきこえ給て中将のおな
しことにおもひがしつききこえさせ給とのもまことの御むすめよりもい

ますこしゃんことなきかたそべておもひかしつききこえ給へり十に四五
あまらせ給へる御かたち有さまほのみたてまつらん人はいかなるものゝ
ふなりともやはらく心がならすつきぬへきに中将の御心のうちはことは
りそかしはしささりともなすらへ（9ウ）なる人もありなんとたの
まれ給しをかのよしたかかくれみのをこそえ給はねとをのつからたかき
もくたれるもたつねよりつゝいたゝのはしほくつれといとけちかきほと
にこそあらねたちきゝかひまみなとはかしこく御心にいりたるまゝにお
ほつかなきはすくなけれとこの御かたちありさまになすらふはかりのあ
りかたきわざにこそとおほさるゝまゝにいとゝ入しれぬ心のうちだおも
ひこかれ給さまいとをしくをとなしのたきとやつるになりはてんと見ゆ
るをさすかに忍ひまきらはし給にはれくしからすむすほゝれ給へる御
けしきをとなひ（10オ）給ふまゝに人の御くせにこそと忍ふもちす
りをたれもえしり給はぬなるへしおほき大とのゝ御かたにそかやうの人
いておはせていとつれくにおほさるゝまゝにさるへからん人のむすめ
かなあつかりてあつかひくさにせむなとあけくれはうらやみ給ひけり源
氏の宮の御かたちなたかくて春宮いとゆかしうおもひきこえ給へるをけ
にこそはつることならめとおほしたり内のうへもむかしの御ゆふこん
をおほしわすれすあはれにきこえさせ給ひながらもおほつかなくてすこ
させ給ふにさやうにて内すみもし給へかしとをとゝにもきこえさせおと
ろかさせ給（10ウ）ぐりされどゝしき御有さまをいますこしねひ
とゝのほり給ひてこそなとおほろけならすおほしをきつる御いそきなる
へしかくいふはとにう月もすきてさ月の四日にもなりにけりタつた中
将の君うちよりまかて給みちすから見給へはあやめひきさけぬしつのを
なくゆきちかひもてあつかふさまにもけにいかはかりふかゝりけるとを
ちのさとの恋路なるらんとみゆるあしもどゝものいみしけなるをいかに
ぐるしかるらんとめどまり給て

うきしつみねのみなかるゝあやめくさかゝる恋路と人はしらぬにと
そいはれ給たまの（11オ）うてなの軒はにかけて見給はをかしうのみ
こそおほさるゝを御くるまのさきなるをおとろくしき御すいしんのこ
ゑくにおひとゝめられて身のならんやうもしらすかゝまりぬるを御ら
んしてさはかりくるしけなるものをかくないひとせひせさせ給へはな
らひにて待れはさはかりの物はなににかくるしとおもひらんと申を恋
のもちふはわか御身にならひたまへれはこゝへうくもいふかなときゝ給
おほきなるもちばさきもつまことにふきさはくを御くるまよりすこしの
そきつゝすき給にいひしらすあやしきほりともにたゞひとすちつゝを
きわだすをなに（11ウ）の人まねすらんとあはれに見給ふあふきをふ
えにふきつゝほの見え給へるゆふはへの御かたちまことにひかるやうな
るをはしとみにあつまりたちてみたてまつるあくる人々有けり御くるま
などもいまはをとなしくなり給めれと御ともさうしき御すいしんなど
はいとわかくをかしけにをもゝちけしきすかたなどもなへての人と見え
すめつらしくうつくしけなるをあはれあれか身にてたにあらはやなにこ
とをおもふらんとわかき人々はめて給ひてすき給もなをあかねは軒のあ
やめ一すちをひきおとしていそきかきてはしたまのゝをかし（12オ）
けなるしてをひてたてまつるをくれてはしる御すい身にとらせてかへる
をいつくよりとか申さんやかて御くるまにまじり給へとてとらへつ御ら
んすれば

しらぬまのあやめはそれと見えすともよもきかかとはすきすもあら
なんとあるいかなるすき物ならんとほゝゑまれ給てつかひにとはせた
まへといはんやは心とき御すい身そのわたりにてふてもとめてまいらせ
たるしてふところかみにかたかなにて

見もわかつすきにけるかなをしなへて軒のあやめのひましなければ
いまわさとまいらせん（12ウ）といはせ給てわらはのいらん所たしか

に見せよとの給へははしとみたかくあけわたして人々のすきかけあまた
見え待つと申せはなに人なるらん見しりつるやとおぼせとかやうに（の）
うちつけけそなとはわさと御心にもふらしてたゞあるましきことをそい
かなるも御心とゝめ給へかめる又の口はさるへき所々に御ふみかき給色々
のかみの色はたへなとえならぬあまたとりちらしてすみこまやかにをし
すりてかき給ふ御てはけになにてかはすこしも物みしらん人のいたつら
に見すくさんと見ゆるに御うたともそさしもことになへての人のくちつ
きにてた（13オ）にをかしとも見えぬはまねひたかへたるなめりさ大
将の御むすめせんえう殿ときこえて春宮いみしうときめかし給をいかな
りけるかせのたよりにかほのかに見きこえさせ給てけりされといかてか
おもふさまにもあらん御せうそとたにおぼろけならてはかよふことかた
くそありけるあまりにまちとをなりけるも恋しくおもひいてられ給て
恋わたる袂はいろもかはらぬにけふはあやめのねさへながれて一條
院の姫宮の御けはひもほのかなりしかはにやなへてならぬ心せしをい
かて御かたちなどよくみたてまつらんと心に（13ウ）からり給へは少
将の命婦のもとへれいのこまやかにて中には

思ひつゝいはかきぬまのあやめ草みこもりなからくちやはてなんな
とやうにてあまたあれとおなしうちなればとゝめつかやうにおりにつけ
たることはなことはちらし給へと心のうちににはいつまでかとのみこの世
はかりそめにものすさましくそおほさるへき丁子にくろむまでそゝきた
る御ひとへにくれなるのはかまき給ていけのしやうふの心ちよけにしけ
りたるをなめやり給て一しよにさんす《すんにみてるイ》とすむし給
御こゑはなをたくひなしありつる御かへりいづれ（14オ）もをかしけ
なるにもせんえうてんのは御ても心ことにをかしけにて

うきにのみしつむみ草となりはてゝけふはあやめのねたになかれす
とあるけしきなどもむかひきこえたる心ちしてらうだけにあはれあさか

らねはすこしなみたぐまれたまひぬその夜はもしさりぬへきひまもやうちわたりにいてたち給にいとめしさへあれはまいり給にまつとの御かたへまいり給へりけふはいまたみたてまつりたまはさりつるためつらしきにほひそひ給へる心ちしてうちゑみつゝくくとまもられ給内よりめしあれはまいり(14ウ)侍みやの御かたへ御せうそこやと申給へはけされぬならぬさまたきゝまじらせつれはまじらんとしつるをかせにや心ちもなやましくてくらし侍りつるをこまつとめての程にためらひてまいらんあつき程はしはしてゝやすませ給へとかしとおもふわれいの御いとまや有かたからんときこえさせ給へは御いらへしてたち給ぬまたしきにあつさとこれせきとしかなにしにねにめすらんとつぶやき給をはゝ富きゝ給てくらしうおぼえ給はゝなにかはまいり給うちわなどせさせてふし給へかしとて心くるしけに見やりきこえさせ給ふさうかん(15オ)のくれなるの御ひとへにおなし御なをしのぶとこきにからなでしきのふせんれうの御さしぬきのすそまでたをへとあてになまめかしうきなし給へるものゝ色あひなとなへての人のきるおなし物とも見えぬをなとがくあまりゆゝしくおいなり給らんとなみたをひとめうけてせちに見をくらせたまへるを御まへなる人々ことはりなりかしとあはれに見たてまつる人々ことうちにはわさとせちゑなともなき世のつれくにおほしめざるゝにあま靈さへたちわたりて物むつかしきなくさめに春富わたらせ給て御物かたりなとあるなりけり御前のひ(15ウ)ろひさしに大とのゝこん中なこん左兵衛督右大將の御子のさじしやうなどやうのわかゝむたちめあまたさふらひ給に源中將のまいり給はぬをひとしき五月雨の空ひかりなき心ちせさせ給てめぬなりけりこよひのえんにはさふらふかきりの人々はさえのかきりてをおしますひとりつゝ心みんとのたまはするを春宮もけうあることのたまはせてさまへの御こともたてまつりわたす中なこんひは兵衛督しやうのことさぶしやうの中将わこ

ん中務宮のせうしやうしやうのふゑ源中將よこふえたまはすたゝいまいみしき物の上手ともなるへしをのへいの音ともてをつくし(16オ)てきかせよとの給はするをたれもひとにかきませてこそあやしさもまきらはしてつつかうまつらめどはりなきわざかなとつかうまつりにくゝわひ給ふ中に中將はよろつのことよりもまたたはふれにも更にまねひ侍らぬものをとそうし給をたゞそのしらさらむことをこよひはしむへきなりとの給はすれとをしる人たに侍らはたどるゝもつかうまつるへきにをのをのてをつくし給はんなかにたとへしくはしめ侍らんはけにかきりなきよのためしにや侍らんとてことのほかにて手もふれたまはねはいとかはかりの心はへとは思はすこと有つれ(16ウ)ことのほかにこそとしころおとへの思ひたりつるにもをとらすこそ思ふにかはかりのことをたにひふまゝならさりければましてよろつをしはかられぬよしくいはしとまめたち給にじとわひしくてかしこまりてとりよせ給ても物にませてはをのつからかたのやうにもまねひ候なんひとりはいとわりなきわざなれとなやめるけしきのをかしさにうらみはてさせ給へくもあらす御らんしける人々もなかへことなる御あそひと心づくひしてとみにてもふれ給はす中將の四五のさえばかりにたに侍らぬものゝて(17オ)をまきれなくひきあらはし候なんはつかしさによろつの人のかはりにことをかへつゝつかうまつらせはやとこんちうなこんそしこへはひとつをたにさはかりゝろこはからんにまして人のかはりすへうもあらさめりとてせめさせ給へはをのくこゝろつよひいたうしてひきいて給へるものゝ音ともいとおもしろし中將のふえに成てきていかにつかふまつるましきかなとたひくまめやかなる御けしきにてせめさせ給へはいとわひしくてかくとしらませはまじらざらましをとくやしけれとのかるへうもあら(17ウ)すふえをもうるゝしけにとりなしてことに人のきゝしらぬてうしひとつばかりふきならし給へるにうへはをとこきゝ

つれどいとかくまとはおぼしめさゝりつるをいままでみゝならさゝりつるうらめしさをさへひきそへておぼせられてめておどろかせ給さまいとこちたしきくかきりの人々さらにこの世のものゝ音とはきこえぬにまたもとゝめかたけれと中ゝなる程にやめ給ぬるをいとあるましき」とゝせめの給はすれとたゝかはかりなんをことのたはふれにをしへ侍りしこれよりほかにすべておぼえ侍ら（18オ）すとそうし給へはいとうたてくそらことをさくつきくしういふかなおとゝのふえの音にたるべくもあらすすべてがくるしとおもはれんことさらにはしこよひは猶うらみとくはかりとあながちなる御けしきのかたしけなきもいとわひしくて皇太后宮のひめ宮などのうへの御つぼねにおはしますころにて心にくき御あたりはなに事ものこりなくはきかれたてまつらしと思ふかたさへいとゝしきなるへし月はとくいりて御せんのとうぶの火ともひるのやうなるにほかけにかたちはいとひかるやうにてはしらによりてま（18ウ）めやかにわふくふきいて給へるふえの音雲井をひゝかし給へるにみかとをはしめたてまつりてこゝのへのうちのしつのをまでききおろきてなみたをおとさぬはなし五月雨の空物むつかしけなるに物やめみりりきこゆらんとまでゆゝしくあはれにたれも御らんするにおとゝましてみたまはいいかはかりいまゝしくおぼさんわか御心ちにもおどろかせ給御そてもしほるはかりにならせ給ぬよひすぐるまゝに雲のはたてひゝきのほる心ちするにいなつまたひゝして雲のたゞすまゐれいならぬを神のなるへきにやとみゆるに（19オ）ほとなく空いたはれてほしの光とも月にことならすかゝやきわたりつゝこの御ふえのおなしこゑにさまくのものゝ音とも空にきこえてかくの音いとおもしろく御かと春宮をはじめ奉りていかなることそとあさみさはかせ給に中将君ゆゝしきあはれに物心ほそくおぼされておさへをしむてもなくふきすまし給へるをあまりなるまであさましきにたれもくあきれたるやうなりかく

のこゑへちかくなりてむらさきの雲にのりてあそふもいとちかく見ゆるをみさはきたるに中将の君物心ほそくなりていたうおしみ給ふ音を（19ワ）やゝのこすくまなくふきすまして

になつまの光にゆかんあまのはらはるかにわたせ雲のかけはしと音のかきりふきたまへるはけに雲のなかにひゝきいるに月の宮この人もいかてかおとろかさらんとおぼるにかくのこゑへいとちかくなりてむらさきの雲たなひきたるをみるにひんつらゆひてひしらすをかしけなるわらはのしやうそぐうはしきしたるふとおりぐるまゝにいとゆふかなにそとおぼゆるふとうすきころもを中将にうちきせ給て袖をひき給をわれもいみしう物こゝろほそくて立とまるへき心ちもせずかくめて（20オ）たき御有さまのひきはなれかたくてふえをふくくさそはれぬへきけしきなるに御かと御こゝろさはかせ給て世の人のことくさにこの世の物にはあらす天人のあまくたれるならんとのみいひおもひたるはまことこそ有けれおとゝのかやうのことをたまさかにせさせす月日のひかりにあてしとあやうくいまゝしきことにおもひたる物をめにみすべものはたてにまよはしてはわか御身もこの世にすこさせ給ふへくもおぼえさせ給はねはなみたもゑとゝめさせ給はすことにみしき御けしきにてひきとゝめさせ給にましておとゝはゝ宮などの（20ウ）きゝ給はんことおぼすにいとはしうおぼさるゝこの世なれとふりすてかたきにやかゝる御むかへのかたしけなきにひとへに思ひたてと御かとの袖をひかへておしみかなしみ給おやたちのかつみるたにあかすうしろめたくおぼしさよ（に）はこのたひの御ともにまいるましきよしをいひしらすかなしきおもしろくつくりてふえをもちなからすこしなみたくみ給へる御かほは天人にならひ給へるにもにほひあひ行はこよなくまさりてめてたき御こゑしてすんし給へるにあめ（21オ）わかみこなみたをなかし給てか

くに事もこの世にすぐれ有かたきによりさそひつれと十せんの君のおしみかなしみ給ことはりにめてたうかなしきふみの心はへによりとくめつるくちをしさをつくりかはして雲のこしよせてのり給ぬるなこりのにほひはかりとまりて空のけしきもかはりぬるをあさましなどもおろかなることをこそいへめつらかなりと見るかきりは夢の心ちし給ひけり中将の君はあめわかみこの御ありさまをもかけにこひしくていみしう物あれと思ひたるさまにて空をつくへとなかめいり給へるけし(21ウ)」

「この世の(に)心とくめすやなりなむとあやうくうしろめたくおほしめさて何事に心をすこしなくさめんとおほしまはすに大臣になすともうれしともおもはしおとくもさうにうけひかしとかひなくおほしめすに皇太后宮の御はらの女(一)の宮の御かたち心はせことはりにもすきておはしますをいみしくかなしき物にしたてまつり給けり一の宮はこのころ齋院にておはしますきさきもこの宮をはたくひなく思ひかしつきえさせ(22オ)」給てよのつねの御有さまなどおほしかくへくもなきを中将のいよひのものゝ音に天人たにきくすべくしたまはてをはしてさそひ給へりにたゞにてやませ給はんことあるましきことなるにそへてかく心くるしけに思ひあくかれぬへきけしきなるに宮このころさかりにとくのひ給へるさま見てまつらんにはこの世にはえあくかれしとおほしなりぬおほ殿には中将の君はこよひはいて給ましきにやとたつねさせ給ほとに藏人所のかたにこはたかに物いふをなに事ならんときかせ給にいよのかみなにかしのあそんまじりて内にかうへのこと侍なると申をきかせ(22ウ)」給御心ちどもいかゝは有けんさらば(に)うつゝの事ともおほされすのほり給つらんあとたにいま一たひ見んとの給よりほかに物もおほえ給はぬ御けしきながら御さうそくなとかたのやうにしていてたまひ

ぬるをばゝ宮はたゞ御そを引かつきてなきふし給へるよはいかに成ぬるそと見ゆるまでとのゝうちさはきたり御車そひこせんともまいりあへすみたりかはしきよの御有さまなりみちすからほりはて給なん跡をみんちにあすまで世にありなんやとおほしつつけらるゝになかれ出る御涙ちくまの川わたりけるにやとみえたりみちのほとれいよりも(23オ)」とをくおほされて人にひかれていり給にこゝのへのうちも物さはかしけもなしひたきやの程もつねよりもあかくみえわたりてこゝかしこのはさまへのつらなどにも物いふことへたゞこの事なるへしどきゝ給にさてまことにほり給ひけるにやいかにじふそとおほすに心ちもまとひてたふれ給ふ(ひ)ぬへし殿まいらせ給へと人々たちさはぐに中将きゝ給てこのことによりてならんかしいかはかり御心まとはし給つらんとおほすもいとおしくて殿上くちにさしいて給へるをおおはしけるとうち見つけ給へるそ中くいみしきやいかななりつることをのれをすとほはいつくへお(23ウ)」おはせんとしつるそとくひもやり給はすおほゝれ給をけにとくまらす成なましかはかきりある御いのちもいかゝなり給はましとあはれにみたてまつらせ給ふためらひて御前にまいり給へれば有つる事ともかたらせ給にすへてうつゝともおほえ給はすに事もいとをしむることも待らすおほやけにつかうまつりわたくしの身のためもおどこのむけにむさいに侍るはいとくちおしく侍ればそのかたはかりはかたのやうにみあかせとやいひしらせ侍りけんましてこのことたはふれにもまねふらんとこそ思ひ侍らさりつれいかにかく世のためしにもなりぬへくふきつたへ侍りける(24オ)」にかめつらかに思給へらるゝかないかにも又たくひも侍らねは心におとくことなぐていきて侍らんかきりは見侍らんをのみこの世のよろこひたは侍るへきにじとつらくなんとこよひはすべてうつし心も侍らすむなしき跡を見給つけたらましかはあすまでながらへおほやけにもつかうまつりわたくしのあまたのほたしともも

みたまへさらおしをかはらぬさまをみせさせ給へる」とよれ「ひ申給つゝ」とおやうづくしろめたしとみやう給へるけしきの」とはりだふと「こよひよりは見え給へは人々もみなき給ぬ中将の君はかくとこちたき御あそひ（24ウ）」のなこりもものむつかしうあやまちさへしたる心ちし給てさふらひ給ふをうへめしよせて御さかつきたまはする」とて身のしるはわれぬきへせんかへつとおもひなわひそあまのはいわもとおはせらる御けしきさにやと心うる」ともあれとてやむさしのわたりのよるのこもならましかはけにかへまさりにや見えましと思ひくまなきこへすれといたうかしこまりたまひて

紫のみの白衣それなはをとめの袖にまさりこそせめといはれぬるもなにとかはき「わかせ給はん」つれもむひのをりはなれぬ（25オ）」御なかともなれはいとよかりけりつねよりも物あはれなる御けしきにてしつまりてさふらひ給よそひかたちとおほろけの女はみかとの御むすめなりともならへにくきを二宮はけしきはおはせとおほしめすなく一心にあくる心ちすれは人々もまかて給殿も中将の君もひと御くるまで出給ぬは「宮まち見たまへる御けしきおもひやるへしいかに」うしがぬらんとて御みつかまかなひてそ【そのかしき】え給へとまことにくるしうなやましとおはされて「よひはいかにもへふように待てやすみ侍らんとてわか御かへわたり給（25ウ）」をひと「こよひよりはかたとき立はなれ給はんもうしろめたくわりなしとおぼしたるけしきにて」よひはこなたにものし給へる（と）せちにきこえ給へはおましなどまじらせてね給ぬるやうなれとめてたかりつることも思ひてられてえまどろまれ給はすなとなく心ちもまことだうかひてありつるみこの御かたちをもかけに恋しく見え給けにとの「の給ひつるやうにこの世には有はつましきはしめだやと我ながら心ほそしげわたのそすめしよせしの御かたはいにやくはせ給とのものもねたまはす今夜の」と「の御かたはいにやくはせ給とのものもねたまはす今夜の」と

かたりたまへはふともゑへ（26オ）」へ覚してあすよりははしむく御いのりのいとなどの給はせてたるへきけにしなとめしめつてやん」となくしるしあるへき人々してはしめおこなはせ給へき御いのりともいちだけに覚しをきてのたまはするさまきへふし給てもなとかくしもおはからんかゝる御こゝろともをしらすかほにあちきなくさるましきことにより身はいかにしなさんとおぼるに人やりならす枕もうきぬへしあるましきことに返々思ひかへせとあけくれさせしむかひきこえながらわきかきこへ（26ウ）」おもせずうへのじみしき御心さしとおほしめして給はせつる御みのしるはいとかたしけなくおもひしけれとかひへしくきまほしくもおはされすむらさきのならましかはとのみおほえで

色々にかさねてはきし入しれす思ひそめしよはのさにじるもとそかへすべくもいはれ給ぬにあけぬといひけん人もうら山しきにからふしてあけぬる心ちすれはひんかしのわたとのへつまとをしあけ給へは雨すこしぶりたるなこりあやめのしつく所せけれとそらはあま雲はれわたりてほのくと（27オ）」あけ行山きは春のあけほのならねとおかしきにはなたち花にやとかるにやほとくきすのほのかになきわたるねにあらはれにけりとあはれにき「給ふ

夜もすからなけきあかしてほとくきすなく音をたにもきく人もなしとひとりこちたすみ給まにしんしきによこんせんたんこむしんみめうとゆるかに打あけてよみ給へるじみしきへうほそくたうときをば、宮おとこなときへ給て猶さまへにとあまりなるさまかなかくしもおひいてけんまたこそ天のむかへあれとゆくしきおはされて宮にさり（27ウ）」出給てなとく夜ふかくはいて給へるそ五月の空は物をそろしかなる物との給ふまにすこはなこゑになり給ぬ殿もおきいて給て猶このいふはかりは内にもなまいり給そけふより七日はしめさするふの

りのほとはおなし心に仏をもねんし給へなとき「え給にたはふれのくちすさひもこちたくむつかしうのみおほさるれはいつちかまかりいてんと給てたいへわたり給ひぬそのころの事にはたゞこのことをあめのしたにひひの「しりけりおぼやけにも日記の御からひつあけさせ給てあめわかみこと中将といづくりかはさせ給ひけるふみともかきを(28才)」かせ給ひけりとしへたるみちのはかせともたかきもいやしきもの御文をみてなみたをなかしてめてまとふをこの「の」とにはしたりあつさのわりなき程はいと水こひとりにもをとらす心ひとつにこかれ給をしる人なしくれつかた源しの宮の御かたにまより給へれはしろきうすもの「ひとへき給ていとあかきかみなる文をそ見給ふ御宮(み)はひとへよりもしろくすき給へるにひたひかみのゆるくとこほれかゝり給へるすはうしろとひとしくひかれいきてこちたくたなはれたるそそのきすゑいぐらをかきりにおひゆかんとこころせけなるものからたをく(28才)」とあてになまめきみえ給かくれなき御ひとへにくれなるのはかまに御くしひまくより見えたることしきかいななどのうつくしさ人にも似給はぬはあまり思ひしみにけるわかめからにやとまほられ給てれいのむねつふへとなりさはけとよくしのひかへしてつれなくそもてかくし給めるいとあつき程にいかなる御ふみ御らんするそときこえ給へは齋院よりゑともたまはせたるとくまなき日のけしきにはるくとにはひみち給へる御かほつきをまはゆけにおぼしてすこし打あかみてこの御ふみにまきらはし給へるよういもてなしまみなといひつくすへうもあらす(29才)」めてたく見え給ふに涙さへおちぬへく見え給まきらはしにこのゑともをみたまへはさうに中将の日記をめてたくかきたるなりけりと見るにあひなくひとつ心なる心ちしてめとまる所々おほかるにえ忍ひ給はてこれはいかへ御らんするとてさしよせ給まへに

よしさらはむかしの跡をたつね見よ我のみまよう」ひの道かはとも

ひひやらす涙のほろくといほる「をたにあやしとおほすに御てをさへとらへて袖のしからみせきやらぬけしきなるにみやいとあさましくおそろしうなり給てやかてとらへ給へるかひなにとらへられたるやうにおぼしたるだいウ」けしきのぶひしらぬものにとらへられたるやうにおぼしたるだいと「心さはきしてこへら思ひつる心のうちをかたはしたにうちいつへうもなく涙にのみおぼれ給へりはけなくをはしまししよりさるへきにやたうりのまゝの心さしただうちそへ人しれすこへらのとしこねをたにたかなくよもなくおもひこかれ侍りながらあまりしらせ給はてやみなんかたれものちのよのためまでうしろめたう侍るへきによりもらし侍りぬること中へあさましけれ又いとがくある「さましきものおもひする人のたくひむかしもいまも侍らんやと思ふをあまりかくうとましけ(30才)」におぼしめしたるこそ心うけれ

かくはかり思ひこかれて年ふやとむろの八しまのけふりにもとへかたはしたにもらしそめつれはとしをへて思ひこかれてすこし給へる心のうちをきこえしらせたてまつり給におそろしき夢を見る心ちし給てわなゝかれ給をむけに御らんししらざらん人のやうにかはかりをたにおそろしこおぼしたことなくへうらみ給ほとにんちかくまいるけしきなれはすこしのきて今よりはいかににくませ給はんすらんにはかりならん御心かはりは中へ人めあやしく侍らんおぼしうとむなよいはきりとをし侍るともをときへもあるまし(30才)」きこと「おもひしりたれはよもみぐるしき心のほとは御らんせられあまりにおもひわひ侍りなはかよはぬさとにそゆきかくれ侍らんかしさやうならんおりはさそかしとおほしめしいてさせ給へかしとてなときこえしらせ給こともおもひやるへしがれともいとちかくしもさぶらはぬ人はいつもけちかき御ならいにめもたゞねならんかしゑみ侍らんとて人々ちかくまいれば宮は御心られいならぬとまきらはしてちじさきみき丁ひきなをしてふさせ給ぬは君

もかほのけしきやしるからむとおぼせはたち給ぬるに宮はひまそよりつにおぼしつゝくるかゝる心おはしける（31オ）」人を離しらてたれよりもなつかしくおもひてあけれさむかひてすこしけるよとおはすにありておそろしきにもさるへき人々の御あたりならておひいてけるをあはれにおぼししられてやかてふしくらし給へるを御めのとたちなとれいならぬ御けしきはいかなることそとあやしかるにもたれもかゝる御心をもしらぬよかやうにつねにあらははつかしうあるへきかなとおはすにありてうき世はとけふそおぼししらける中将の君も」といてそめてのちはいとお忍ひかたき心のみみたれまさりてつくるとなかめふし給へるにとの御かたよりまいり給へとあれは何となく心（31ウ）」のなやましきにものうけれときゝ給は又おとろきはき給はんもきゝにくけれどさうそくしどけなげにてまいりたまへりひんのわたりもいたううちとけてないかしろなる御うちとけすかたのうるはしきよりも中へ又かくてこそみたてまつるへかりけれど見えてみまほしうなつかしきさまのし給へるをれいのうちあまれてみたてまつり給よさり中宮のいてたまはんにまいり給へうへもひとひとりごめたりとおぼせられきとのたまひて源しの宮の御ことを春宮のかく心もとなからせ給にいたくわひさせ奉るとうらみさせ給にすゝしくなりてさもや（32オ）」と思ひたつを右おほいとのゝたゞひとりかしつかるらんむすめのとをにたにならはと心もとなからるゝからうして此八月にまいらせんとけしきとらるゝをせいやへきにもあらすきしろひ給はんもひんなけれは冬つかたさらすはとしむへりてなどおもふはいかゝあるへからん春宮もいそかせ給うちもさこそあらめと御けしきあれとなにかは人のいつしかと思ひいそかれむをとおめんもいとをしかるへしなときこえあはせ給をつるの事そかしさこそあらめと思ひながらもむねはふたかりまさりてけしきもかはるらんとおもへつれなくもてなして人のことをのへ（32ウ）」させ給はんいとを

しうや侍らんこの御ことはいつも心のとかにてあえ侍りなんこん中なこの身にそふかけにてさはくなれはわづら（は）しきにかくいそかるとそき侍と申給へはこゝにもさ思ふなり右のおとゝのひすらんむすめこの御かたにえこそなはさらめそうちたちにはなたかにきらくしきまにやあらんとそをしはからるゝやはゝめのとよりほかにあたりにもよせきはもなくこそかしつくなれ身つかくゆる宮はらのむすめのやうにやあらんとてわらひ給へはかの思ひかけさりしよひのほかはいとしもたまのきすはみえさりしかとはなたかはよくいひあて給へり（33オ）」とおもふにすこしほゝゑまれぬるけしきをしるくみ給てわかゝりし時かひま見をつねにせしかはさもさまくくなる人をあまたみしかな人はいと有かたき物そかし思ふさまなる人にあふ事はかたきわざなりや故院のことくはいみしう覚しめしなからこのかたはあやにくにせいしさいなみてたやすくもありかせ給はさりしかとかしこうぬすまれいてゝいたらぬくまこそなかりしかかくさまへえさらぬ人あまたものし給しにをしけたれてあはれと思ひしわたりもありしかとかひなくこそやみにしかなとむかしの事ともおぼしいてたりわからくより猶やんこと（33ウ）」なきかたにさたまりぬはおもりかによきことなりひとりあるはをのつからさもあらぬ心もあくがれてかろくしくわろきことそなどの給てかの御けしきありしふえのろくはひとかたしけなき事にこそそのゝちうちへにもあないきこえさせぬはいとひんなき事なりよき日してしううの内侍のもとなどにほのめかし給へかしなどのたまへはあなむつかしやはづへき（く）も覚えぬ世にさやうにさたまりゆていかにわひしからんときくにさへそあつかはしきよるのころもなりける御けしきかたしけなかりきといひなからさはかりの御事をうけたまはりてき（34オ）」こえさせいてんや中へなめに侍らんとてすさましけなる御けしきなれは心にいらぬことなめりとおほすもうへのおほさんこといとをしくてたち

まちにこそいはれさりめさのたまはせてんをしらすかほならんはひか
くしかるへきわざかなとれいならすものしけなる御けしきなれはわつ
らはしくてたち給ひぬ

ほかさまにもしほのけふりなひかめやうらかせあらくなみはよると
もなどいなふちにくちすさひ給てはゝ宮の御まへにまいり給へれはあつ
けにやこのこゑこそいたくやせてみえ給へとて心くるしけに覚したるけ
しきあくまでらうた（34ウ）けに見え給を殿のさはかりくまなくみあ
つめ給けんにおやと申ながらもすくれたる御おほえはことはりそかしと
見たてまつり給なつやせはるせ物のことととかやかたへすゝしきかせに
したかはんもあしかるへきことかはなどかうもしいひそめけんわたし
もりにやとはましとてゑみたまへるにほいさとほるゝこちし給へる
をめつらしからん人のやうにわかき人々見たてまつる中つかさといふ人
みちのはてなるとなづけきし人のありしこそことはりにゝくからねとひ
とりこつをしりめにみおこせ給ていかにとかやのこりゆかしきひとりこ
とかなとの給をあなわびしきこえけるにやと（35オ）わふるさまもに
くからすみわたし給との「女」の宮に御ふみたてまつれとのたまひ（へ）
るこそたゞさはかりのなをさりことだにおほ宮きゝ給てめさましくある
ましきことゝむつかり給ひける物をやうにほのめかしいてはしたな
められたてまつらんこそたゞなるよりは心やましかりぬへけれどゞさは
かりの御けしきにてその夜のめんほくはかきりなかりきかし中くなる
事いひいてゝうへもあされたりとそおほされん數ならぬものはすきく
しきこのまでさりぬへからんかけの小草の露よりほかにしる人もなきな
とをたつねいてよすかともなれかしさらすは又いく世もあるま（35ウ）
しからん世にほたしなからんよしかして涙くみ給へるをはゝ宮御らん
して御かほの色もたかひてたはふれにもゆゝしきことなたまひそいみ
しきことなりともわか御心たこそあらめものうくおほえ給はんをあなか

ちにもなにかはまいてはゝ宮のさのたまはんにはあるましき「こゑ」にこ
そは一日三位の物かたりせしつるてにふえの音のめてたかりしにめて
二の宮のことをほのめかししはいかゝ思ふらんこのころさかりにをかし
けにをはするをゆくすゑのたのもし人にゆつらんなどうへの給はせた
るとかたりしはかたしきなくきゝすこしてやとこそありしかとのたまふ
かくたにのたま（36オ）はゝにかゝはせむと打なけれかれてたち給ぬく
れぬれは内へまいり給つるてにまことかのよもきが門はいつれそとゝは
せ給へはみをきしすいしんこもとに侍るそこと申候しかは又の日みた
まへしかはおろしこめて人もさふらはさりしあやしさにかたはらの人に
とひさふらひしかはつくしまかりにけるなかとのみといふ人のいゑ
にさふらひけりめのはらからともなん宮つかへ人にあまた候なる中つか
さの宮のひめ君のめのとて侍るなりと申せはさやうのものゝきあつ
まりたるおりのわさにや少将のめのととかやいひて大なこんの五せちに
出たりしされものにやなど（36ウ）おほしやらる中宮出させ給ぬれは
みこさへうちくしたてまつらせ給て三條とのゝ御かたにさはいへとおほ
やけしききらくしき御有さまなり内の御使日ことにまいりなとして殿
もかゝるほとはこなたかちにそおはします宮の御有さまかたちなどあら
まほしうけたかうはつかしきてものし給おほきおとゝの御かたはなか
のこのかみにてもとかしこにおはすれとかゝるあつかひぐさももち給は
ねはにや我御有さまひとつをはなやかにいまめかしうもてなひ給てわれ
はとほこりかにをしたちたる御心をきてにそおはしける人よりは（37オ）
いかてとりていてたる御もののみなとしていとわららかににくがら
ぬ御心をきてなるへしかくさまへにもてかしつき給御さまともをそあ
けれうらやましくおほしたる中将の君はありしむろのやしまのゝち宮
のこよなくふしめになり給へるもじとつらう心つきにいかにせましとの
みなけきまさらるゝをわか心にもなくさめわび給てをのつからもやまき

るゝと忍ひありきともに心いれ給へとほのかなりし御あたりにに入るも
のゝなきにやおはすて山にのみそおほさるゝ春宮にまいりたまへれはい
りぬるいそなるか心うきことゝうらみさせ給へは（37ウ）みたり心ち
のれいならすのみ侍りてあつきほとはいとゝ宮つかへおこたり侍なりと
けいし給へはなにこゝちにかつねにあしかるへきそ思ひ給ことそあらん
我にはへたてすのたまへとちかうむつれかゝらせ給へは心ちのあしかる
はかりは何ことをかおもひ侍らんこれ御らんせよかくやせ侍しぬへきな
めりとてさし出給へるかひななどのしぶくしけなるさま女もえかゝ
らしかと見え給源しの宮はかくやおはすらんとあちきなくよそへられ
給てせちにひきよせさせ給をあなむつかしあつく侍にとひこしろひ給へ
る御あはひいとをかしかくやせ（38オ）そこなはるはかり思ふらんこ
とこそ心えたれなかすみのしうかまねし給へるなめりな人もさそかた
りしおとゝもかゝれはつれなきなめりとひまこそおもひはせらるれと
まめやかにの給はするを人のとふまで成にけるよとととくるしけれと
つれなきさまにてさらぬすきくしさをたにこのみ侍らぬになと有かた
き恋の山にしもまとひ侍らんと猶ことすくなゝるけしきやしるからんあ
なうたであるやうあるへしとの給はするも御こゝろならひなめりとてわ
らひたまる

わが心しとるもとろに成にけり袖より外に（38ウ）涙もるまでと
そ思ひつゝけらるゝ心ならひはけにさもやあらんまことならぬぐもうと
をもたらねはなどいひたはふれさせ給てせんえう殿にわたらせ給ぬれば
こよひはかひもあるましきなめりとすさましくてまかて給ひぬたそかれ
時のはとに二条大宮の程にあひたる女くるまうしのひきかへなとしてと
をき所にかへると見ゆるに物みすこしあきたるよりまろかしらのふとみ
ゆるはこの御くるまを見るなるへしはやくやり過ぬるをあやしひかめか
とおぼすほとにともなるわらはへのもたる物やしるからんこの御ともの

人みつけてかやくとおひとゝむるにえに（39オ）けておひとゝめら
れぬ御すいしんのいたくとかめかゝりてしたすたれかけ給へるはやんこ
となきそうにこそはおはすらめさはありともしはしをしとゝめてあやに
くにやりちかふるはたそくとあらゝかにとへは仁和寺のなにかしあさ
りの御くるまにてはゝうへの物にこもりていて給ふなりとわなゝきいふ
わらはのあれはいてさはあま君かみんとてすたれをひきあくるに法師は
しりおりてかほをかくしてにくるをこのあま君はなとにくるそとをいて
はしりのゝしるを御くるまをとゝめてかくなせそとせいせさせ給へはう
しかひわらはをとらへてなにものそくととへは仁和寺（39ウ）にな
にかしるきしと申人なりとし比けさうし給ふる人のうつまさに口ひろこ
もりたまへるかいて給をぬすみて給なり法師たてらかくあながちなる
わさをし給へは仏のにくみ給てかゝるめをみせさせ給ふなりかしをしと
とめてしめやかにもやらせ給はてとしこの思ひかなひていそき給ほと
に女くるまとそ御らんすらむたゝとくやれとせめ給へは師にはしたかへ
といふ法文をそうのあたりにとしへ侍りぬるしるしだきゝならひてはし
らせ侍りつるなりこまよりはさらだへくこのしにはしたかひつかはれし
とおそろしかなしとおもひたるを（40オ）かしうなりてゆるしてけり
君にしかくなん申つるくるまにはまことだ女のおはするなめり人はみ
なにけ侍りぬかくて打すてゝはいとをしうこそ侍へけれと申せはなにし
にかゝるわさをしつるしづねにせいする事をきかてばくらんといははいつ
くにかあらんいかてかさてはすてんそわらはにとひておくれとの給へ
はわらはのまかりつらんかたもしり侍らすいまさりともくるまどりにあ
りつるほうしまうてきなんこのわたりにかくれてそ候らん御たいまつま
いらべくらふなり侍ぬとて御くるまつかまつれといへとぬすまれたらん
はいま（か）やうなる人ならん（40ウ）心ならぬことならはいかはか
りわひしかるらんべりきみちのそにさへさすらふよかくてすてゝは有

つるほうしほにのまゝにやるてゆかんさらぬにてひかくてあらは
いかなるこゝちせんとおほすにいとくをしければをくるへき所もし
らすこよひはかりはとのへやるてゆかましとおほすもけうちかつきて
はしりつるあしもとおほしいつるもをかしくみちのほてやふれつらん
と心つきなくゆきにあすかるにやとりどらせんこともかたらひにく
くおほざるれと猶いかなる人のかゝるめは見るそとゆかしければひきか
へしあのくるまにの(41オ)」りうつりてみ給へはいとたとくしきは
となれときぬひきかつきてなきふしたる人ありけりあないとしいかな
る人のかゝる道のそらにたゞよひ給そいかなることありともひとりうち
すてゝ心づくにけぬる人はつらくはおほさすやよしのゝ山にとは思はさ
りけるとこそみてゝまかりなはいますこしおそろしきこともありなん
又ありつるかしらつきもまろいぬとみはきもこそそれまことに御心なら
てかゝる事ものし給ならはおはし所をしへ給へおくりきこえんをほい
もありあの人とわたらんとおほさはまかりなんとの給にあけはひのき
ならはすあ(41ウ)」てにめてたきはさはかりにやと見え給ふを誰にか
とおほえなくはつかしけれとかくの給にきこえすはけにすてゝこそおは
せめざらは有つるゆきしきものゝきててゆかんこと思にかなしければ
ほのゝおほゆるまゝにきこえんとおもへとたゞわなゝかれてとみにも
のものひひてられすたゞなきにのみなきまさるけはひなとよそにて思ひ
つるよりはあてにらうたければくるしり給てさらはまかりぬへき
めりな御心ならぬことゝきつればさもやといとをしさになんにかな
き給ふこのわたりにそものすらんよもみすてきこえしとけしきを見ん(42
オ)」とてたまへはおはしぬへきなめりといとわひしきにいひいて
ん所のさまのはつかしさ又はかくしもおほえぬになきこゑはまして
いとわりなけれとほり川いつくとかや大なこんときいゆる人のむかひに
たけおほかる所とおほゆるをさらだいかてかといふけはひいとらうた

けにをかしきはいかたおほすらんといまそあさましくはつかしきつま戸
なるへし人あけてこゝにといへはくるまさしよせたるに五十ばかりなる
をもとのしなくしからぬさましたる火をいとあかくともしてなどいと
おそくおはしましつる御くるまのをそかりつるかたい(42ウ)」ふの君
やまなり給へるとてよりきたるはかけすかたのみしらすあやしきもうと
ましくおほえ給てなき人きたりとてうちもこそそれとくおりたまへとお
こし給へと火さへあかくてかたはらいたくわりなきにとみにうこかれぬ
をひきおこし給へはきぬなどいとあさやかならぬうす色のなよらかな
にかみはつやくとかゝりていとわりなうはつかしと思ひたるけしき
などなへてのさまにはあらすたゞいとをかしき人さまにそ有けるあやし
う思ひのほかなるわさかなたれならんみてやみなましかはいかにくちを
しからましとおもふ物からさるへきにやかゝ(43オ)」るうちつけ心な
とはなかりつる物をいてやうとましかりつるかしらつきにてなれつらん
ことおもへは猶心つきなれとかゝる道行人をゝろかにはえ覚ししらし
な有つる人に思ひをとし給なよとの給ふにいとはつかしくておりなんと
すればひかへてなといらへをたにし給はぬ道のしるへをうれしとおほさ
ましかはとまれとはの給なましはある心うどゆるし給はねば
とまれともえこそいはれねあすかるにやどりはつへきかけしなけれ
はといふさまと猶その水かけみてはえやむましうおほざれける(43ウ)」
あすかるはかけみまほしきやとりしてみま草かくれ人やとかめんぐ
るままつほと人に見せてをき給たれよとており給ぬるをあくるしひん
なきものをとくるしけに思たれとまことに御くるまのをくれたりけるま
ち給とてやかてそのはしつかたにひきとゝめ給へるに月ははなやかにさ
し出たりをんないとはしたなしと思ひたる物からいたく見えりたるも
のはちにはあらすたゞいとなつかしきをかしきさまのもてなしなどあや
しきまでらうたけなり家の人々いかなることそとあやしかりたちさはき

たり御ぐるまるて（44オ）まいりたるにやときゝ給へとかはかりにて
たちいづへき心ちし給はねは有つるいのりの師やひりこんと物をそろし
ながらとかくかたらひ給女たれとたにしらぬわりなしと思ひたりきみは
おもはすなりけるちきりのほどもあさからすあはれにおほさるゝ事かき
りなし物きたなくうたかはしかりつるいのりのしの心きよさもみあらは
してはわかつくせのありてさる心もつけるにやとまであさからすおほ
さるかねていみしう心をつくしやんことなきあたりよりはならぬ草の
まくらもめつらしくてそののちはよひあかつきの露けさもしらすかほに
(44ウ)「まきれありき給よなくおぼくつもりにけり此女はうちの中な
こんどいひける人のむすめなりけりおやたちみなうせてければめのと
そへのかみなどいふものゝめにてなまとくありける又なきものに思ひか
しつきてとしこる有けるをおとこうせてのちはわりなき有さまにてすべ
しけれはこの仁和寺のいのりのしをかたらひてこれにこの君のことをも
しおつかはせければおほけなき心有けるものにて人しれす思ふ心つき
てかゝるわさはしたるなりけりくるまなとも又かる人なくてうつまさに
ゆききのたよりをよろこひてぬすみもて行なり（45オ）けり有つるう
しかひそこにきてもかたりければいとあさましかりけることかなたれと
いふ人さるわさをし給つらんわか君いかになり給ひつらんいきて見よな
といひはきかくをはしたるなりけりそのへちいきしはをともせねはこ
とほりにひとをしくて人やりたれと返ことをたにもせねは思ひなげく
とかきりなしこの人かくてやみ侍なは御まへの御あつかひもいかてかは
し侍らんゆゝしきわさかなはやう源しの宮の内まいりとてやんことなき
人々のまいりつとひ給なるにまいり給ひねをのれはいつちもまかりなん
このおはする人はたれそ（45ウ）「とよあやしくいたう忍ひ給は御まへ
にはしらせ給へりやといへはしらすよろつたゞ心よりほかにあさましき
有さまなれはとてうちなき給をさすかにあはれとみてわれも打なきぬ又

ある人々一日もみかとをむこにたゞかせ給しにあぐる人もなかりしかは
おはしますをいとひまいらするかへたうとの「御」とはしらぬかいたう
あなつりたてまつらはかとのをさなどいてきてこのかとあけさせんなど
いひはへりければいとこそおぞろしくされはまれくあるものもこのこ
ろはおちてまつてこすいとそわりなきやあてにやんことなくめてたしと
ても（46オ）この定にてはいかゝはせんとしおひて侍れはゆくすゑの
ことも思ひ侍らすあつまのかたへ人のさひ侍にやまかりなましと思ひ
侍るをたれに見ゆつりてかと思もほたしにてそおはしますやといへは打
なきてたれをたのみてかはいつくなりともおはせん所へこそはまたみを
き給はんも心やすくやおほすへき思ひかけぬ有さまをはいかにもあるへ
きことならねはとの給ふもあはれに心ぐるしけれはまことにしるへなく
たよりなきに思ひわひてみちのくにのおぐのさうくわんといふものゝめ
になりてやはいなましと思ふなりけりきみはみなれ給まゝにあはれさま
さりつゝ（46ウ）「なをさりことにはあらすちきりかたらひ給ひぬへし
さるはこれたをとるへき人もみ給はすわか心もすくれてこの事のめてた
しなとわざと御心とまりぬへきゆへもなけれとたゞそゝろにみてはえあ
るましうひとをしく心にかゝらぬひまなくわれながら物ぐるをしきまで
におぼゆるをこれやけにすべせといふ物ならんかくのみおぼえはくちお
しくも有へきかなと日にそへてえさりかたうあさからすのみ覚え給へは
我ながら思ひしらるゝものからまatarゝよなくもなくまきれありき給
こととくにもなりぬ御ともの人々はまたかゝる事はなかりつる物をい
かはかりなる（47オ）「きちしやう天女ならんとさるはいと物けなきけ
しきなるをとをのくいひあはすへしかくいふほとにこのめのといてた
ちいとすかやかなるけしきにて見をきてまつるへきにもあらすさりとて
又かゝる人さへおはしますめれはいかてかはくしたまつらんとするい
かにしてす」し給はんとすらんといひつゝけて打ひそみなくをしはしの

程たにおはせさらんよにはあるへき心ちもせぬをましていつをかきりにかとゝめをかんとは思給らんかくよろつに所せき身をいかにもうしなひてこそふつくへもなとひもやうす心くるしけなればさらはいて立給へきにこそあ（47ウ）なれ御心そし有けなる人をみすてまつり給てあさましきありさまに引くせられたまはんもいとあるましき」とおもひ給ふれとかくの給はすれはなとさすかにことはりを返々いひしらせつゝたゝいてたちにいてたつを見るにさらはいまいかにこそなと人しれすかそへらるゝにいと心ほそけれどあれとたにしらせたまはぬけしきもさすかにたのみかくへくもあらぬにかくこそなとほのめかしきこえんも御こゝろのうちをしらねはつゝましくてたたなにとなく思ひみたれたるけしきなるを猶かくおほつかなき有さまのたのみかたくつら（48オ）きにやと心くるしけれとまたわか行ゑをあまの子とたにのらねは心ぐらへにてたゝあはれにおぼえ給まゝにいひなくさめつゝこの世ならぬちきりをそかはし給ひけるかかる程に夏もすき秋にもなりぬ源しの宮はふるき跡たつね給へりしのちさやかにもみあはせたまはすことのほかなる御けしきをされはよとづらく心うきにいまはたおなしなにはなるとひたふる心もひてきてさるへきひまを見給へと人めこそはることなけれどあさましくうかりける御こゝろはへのうとましうおはされて又いかてかさるみへをたに（48ウ）きかしとよるるし給へはいはまの水のつぶくときこえ給ふへき人まのほとにそざらに有かたかりけるひるつかたまいり給へは大宮もこなたにおはしましてもろともにこうたせ給なりけりとくまいりてけんそつかうまつるへかりけりとてちかやかにる給へるにちいさき御木丁などをしへられてつねよりもはれくしけれは宮はいとはしたなしとおぼせとは宮の見たまへはれいのやうにもえそむき給はす御かほはいとあかくなりてこもうちをしてこはんにすこしかたふきかゝりて御あふきをわさとならす（49オ）まきらはし給へる御か

たはらめ御ひたひつき御くしのかゝりなどいまはしめたることにはあらねとうちみたてまつることに猶たぐひあらしと見え給ふ御有さまのうしきはちよを一夜にまもりきうゆともあく世あるましくおぼゆるにもあすかるのやどりはたはふれにてもあるましく覚え給にいとしきなみたこぼれ給ぬへければまきらはしに御かちはたれそなとさてはちはなときこえ給へと見つけたてまつり給てれいのまつこと事おぼしたゝねは大宮もなをともきこえ給はてよへ内よりたひくたつねさせ給はいつくに（49ウ）ものし給しそ猶かのしゝうの内侍のもとにせうそこのものし給はねはひかくしき」とむつかり給めりきこにはたゝなにごとも御心にまかせてと思にいさやいとなるへき事にかとうちなけかせ給へるも人のおやけなくわからうをかしき御ありさまなりその御いらへはいかにともきこえ給はて殿のれいならぬ御けしきなりつるはこのかんたうにこそ待りけれとうるんにしのたいの御しつらいはなに事にかときこえ給へは故きさいの宮に有けるはくの君のむすめはかこつへきゆへや有けんはくうせてのちいとあはれにてなときこえ給けるをかのうへむかへとり（50オ）てつれくなくさめにせんとなんの給とそありしさやうのれうにやあらんおののこゝのいとあやしきもあなれと宮の少将にゝたりとてかはそれもとの御こにてあれななにかしには似ぬにやあらんはらからあまたもたる人こそうらやましけれとも忍ふへき人たになきにとて物あはれとおぼしたるけしきのけにたゞみる人たに心くるしけなる御さまなれは大宮れいのゆくしきことにくちなれ給へること心うけれといとまへしくとおぼしたるをかはかりのことをたにがくおぼし（50ウ）たるにゆくするはかくしかるましき心のうちを御らんせさせたらばましに宮はまきれいり給ぬれはすさましくてはしつかたに人々と物かたりし

給に御まへのこたれいへらへあつかはしけなる中にせみのあやにくに鳴
いてたるをみ出し給て

「あたてゝなかぬはかりそ思ふ身はうつせみにおとりやはするな
とくわすさひにいひまきらはしてせみくはうようにないてかんきう秋な
りと忍ひやかにうちすんし給御こゑめつらしけなきことなれどわかき人々
はしみかへ（51才）」りめてたしと思ひたることはりなりさはかりあた
りまでにほひみちてむかひたてまつる人はものおもひもわするゝやうな
るあいきやうなとをひとへにほこりかもてなし給はていたくしつまり
て心ちよけならす思ふこと有けにのこりおほかる御けしきにておりく
はものおもはしけに心ほそけなるくちすさひなとのみし給へはあらきゑ
ひすもなきぬへき御さまなり日のくれ行まゝにひもときわたす花の色
くをかしう見わたさるゝにそてよりほかにをきわたす纏もけにたまら
ぬにやとなかめいたしてとみにも立給はすむしのこゑへのもせ（51
才）」心ちしてかしかましきまでみたれあひたるをわれたにともとかし
うおぼされけり月いてゝふけゆくけしきにかのほとなきのきになかむら
んありさまもふと思ひてられたまふおぼろけならぬおぼえなるへしお
はして見給へはおぼしやりつるはしるくしとみなともいまたおるさては
しつかたにそなめふしたりけるにさらましかはとあはれにて袖うちか
はしこまやかにかたらひ給にひるの御有さま思ひ出らるゝによろつにこ
よなきめうつしなとにはなにのなくさむへきそとおもひてられながら
わきとけたかくまことしきよりは中へさまかはりたるうちと（52才）」
けなとよりはしめ物はかなけにらうゝしからぬもてなしなとのあやし
きまでらうたくみてはえあるましくおぼせは思ふことかなふましくはあ
りはてしと思ふ世にほたしとまでやならむと思ひつゝけらるゝにもろき
なみたはまつしるをいかゝ心うらんつねよりも物なげかしけなるけしき
のあはれなればひさしう世にえあるましき心ちのすればよの人なとのや

うなる心はへなともことになくてすぐしつるをいかなりけるちきりにか
はかなくみそめきこえてのちはみすてんことのあはれにおぼえ給をさら
はいかゝおぼすへきそをたにのちの（52才）」とたれいひけんなふに
はかへまほしかりける物をとてをしのこひ給へるそとのすこしぬれたる
なとさやかなる月かけにこれは猶きゝわたる人にこそおはすめれわか身
のほとを思にも猶たのむへき御有さまかはかやうに覚しすてさらんほと
にかりのはかせにまよひなんこそ心にくからめと思へはけに涙とりあへ
すこぼれぬる（も）はしたなくてかほをるところにひきいるるまゝに
花かつみかつ見たにも有物をあさかのぬまに水やたえなん物はか
なけにいひなしたるけはひなとわかひたるものからいとらうたし
としふとも思ふ心しふかけはあさかのぬま（53才）」に水はたえ
せしかくいとうきたることゝおもひ給ともなからへては心のほともいま
み給ひてんならぬなをさりことなとは人にいふ物ともしらさりけり心
よりほかのことをのつかるともわたくしのこゝろさしはかはらじと
なん思ふなと心ふかけにかたらひ給まゝにいとかなしくなりまさりて猶
かくとやほのめかして御けしきを見ましと思ふも思ひたつもすこし人々
しきかたさまにたにあらす中へ覚しやらんにもあさましうはつかしけ
れはたゞ行ゑなくてやみなんとおもひとるかたはつよき物からあさまし
かりける心のほとかなどしははいかにおぼし（53才）」いてんすらん
とおもふにせきやるかたなき袖のしからみを君はたゞひとへにわかひた
るさまにてわか行ゑなきもてなしなどをつらきかたに思ひたると心え給
ひてとかへる山のしるしはとのみちきり給ひけりまことやかのおぼきお
とゞの御かたにははくのひめ君むかへとり給てにしのたいのたまみか
けるにしつらひすゑ給てみ給ふにあてやかにさてもありぬへきまなれ
はとし比のほいかなひてはれくともてかしつき給さまよつかぬまでみ
ゆるとのゝうちにも世の人もいみしかりけるさいはひかなとめてけりと

しは甘にそなり給けれといた（54オ）「くおほときすきてあまりいはけなく物はかなきさまにてけにおほろけに思ひうしないろむ人のはかくしきなくはうしろめたけにそおはしける心におもひあまることありとも色にいたし給へうもあらすことのほかにあさましきことよりも人たにもてなさはをのつから忍ひすぐすべくおはするをよき女のかしつかれ給たるはかくこそおはすへけれとみゆる物からあまりむもれ給へるけしきなとはかくはなくともてなされ給へる御有さまにはたかひてゆくすゑやいかゝ見なされ給はんと心くるしかりけりまたなき物に思ひかしつき（か）れたりしおやの御もとに（54ウ）「てたにかくはるけ所なかりし御心はへのまにてにはかにはゝにもぐれかなしくせしめのとも打つゝきうせにしがは心のうちにはいとかなしかりけるにまめやかに思ふ人たにそはてかくしらぬ所にむかへられて有つかすはれくしくもてなされ給にいとわれにもあらぬ心ちしてほれまとひ給へりうせにしはゝのなましそぐのたかきましらひして人數ならて世にありわふるさすかにゆつきもの見しりかほにてかたはらいたき物このみさらすともとおほゆるありけりをはのあま君かゝる人よひとりてそへたるけにゆへくしくはゝしろにそひてわたりたる中（55オ）中見くるしきをうへ時々見給にいてやとものしく見たまへは（ど）こまかなる御心さまにはあらてさすかにおほとかにて人の有さまなとはいたうも見しり給はす心をやりてうへばかりはかしつき給にこの御はゝしろそあしくせはかたはらいたきことも有ぬへかりける心にまかせたるつくりおやともしたてたるわかうとのおもひやりすくなきかきりかすもしらすあつめさふらはせてよるとなれは殿上人諸大夫までいたしあはせてさはくけしきともいといまめかし君はたゞあかこのむつきにつゝまれたる心ちしてあれにもあらすまかせられ給へりしつらひ有さまなど（55ウ）のめてたくおなしわが身ともおほえぬなどを人しれぬ心のうちにははゝやめのとなどにこれを見せ

たらましかはいかて人なみくになさんとあけくれいひ思ひたりし物をよしなき人にまかせられて心におもふ事もいはまほしきこともつゝましくはつかうてやみにむかひたるやうにおほゆることとおもひつゝけておはしましける九月ついたちこうなをしものゝあるに中将の君中なこんになり給ひにけり大殿これをもひまくしけにおほしたれとさのみやとてしたいのまゝにあ（56オ）かり給なるへしよろつこひ申に内春宮なとにまいり給とてつくるひたゞまつとのゝ御かたにまいり給へるにかたち有さまなとつかさくらゐにそへてゆゝしけにのみ光まさり給をこといみもしあへ給はぬけしきにてたちゐつくるひ給けしきそことはりにもすきてかたしけなくあはれなりける大殿の御かたにまいりたまへるつるてにこのいまひ君のすみ給にしのたいのまへを過給まゝにいかやうにかとけしきもゆかしければわたとのよりすこしのそきたまへはみす所々をしはりで人々あまたけはひしてこぼれいでたりかのきさいの宮の人々もあ（56ウ）またなんわたりまひりけると人のかたりしも心はつかしまた見給はぬあたりなればようゐしてあゆみいて給へれば人々見つけていりさはくけはひとものさはかしきをあやしとみ給に木丁ともおくよりとりいてゝかはくそよくとたてわたしすそうちひろけひもとのよらはれたるをとひきかくひき甘人はかりたちさまよひつくるひさはくきぬのをと木丁などのをとて物もきこえすあはたゞしくみつかぬ心ちし給へといまやそゝきやむと物もひはてつくるとる給へはからうして木丁たてゝのちをのゝきぬのすそ袖く（57オ）ちわらはへのかさみのすそなどのみたりかはしくなりたるをつくるひるてこゝかしこよりをしいてわたしてやうへのとまるにやとおほゆるほどに木丁のほころひをはらくとゝきさはくをともしるべひとり（つ）ほころひより五六人かほをならへてまつわれみんくとあらそひたるけはひとの忍

ふるからにいとかしかましからうして見えたるにやあらんことにめてたかりけりあな物くるはしゃ日比みつる殿上人なとはたゞちなりけりとさゝめきあへるいとをしうおほえて此みすのまへはこままでうるくしう侍けるもとかめさせ給へくやとうらみまゝらするな（57ウ）」との給御けはひけにおほろけの人はふとひらへにくけにはつかしけなればにやそこらひしときこゆる人御いらへきこゆるはなくてそゝやまろはふようなり君の給へへとつきしろひさゝめきたちてにくるともゝありあなわりな物にくるふかまるはましてふようなり《こせたりイ》とてそゝはしるなれはきぬのすそをといふるにやたふれぬきうへとことさゝめきわらひいりつゝはふきだしこるもありあるは又あなかまやへきはかりはつかしき御有さまになへてのほとゝ思給かなともせいすなりさまくあやしき心ちし給てしりめはつかしけにみい（58オ）」れつゝなけしにをしかりてゐたまへるけしきこのみすのまへにはあはすそありける猶たゞきえいりくあふきなと打ならしつゝわらひそるゝけはひとも物ぐるをしければこはいかにとようるまのしまの人ともおほえ侍かなとてすこしほゝみ給けしきなとみすのうちはつかしけなりおぐより人よりきて木丁のまへなる人にたゞうらみをはゝとよみかけよとさゝめくなれはわきみそなめこゑはよきまろはさらにくとわらひいれはあなたゆの色このみやとてかたのわたりをあふきしていたくうつなれはたうしは君な（58ウ）」しどてつむなるへしあしうしてけりひたしくそこはなてく忍ひあへぬこゑいつくならんとをかしきにしぬへければたちのきなんとするほどにおとなしきこゑのたかやかにしたりかほなるいてきてひてやさふらふ人々からこそよき人はをかしき名もとらせ給わさなれかはかりにてはわかうとたちさふらひ給はて有ぬへしとさすかに忍ひてにくみわたしてさしよりてきこゆめつらしき御こゑにそおほしたかへたるかとまて

よしの川なにかはわたるいもせ山人のめなる波のなかれてとけにはゝとよみかくるけば（59オ）」ひしたとにのとかはきたるをわかひやさしたちていひなすこれそこのはゝしろなるへしどきへたまふ

うらむるにあさゝそ見ゆるよしの川ふかき心をくみてしらなんおほつかなき心ちし侍るにうれしき御けはひと思ひ給へるものをこそあしそまに申ない給ぬへかりけれとの給へはさはやかにうちわらひてさらはいまよりのけさんもまめやかにとめさせ給へかしわかき人の思ひむせ侍めれはいぬもきてとかやたかやかにいふあやしきたとへなりまめやかにはおもてふせにやおほさんとていまゝてまゝらざりつる（59ウ）」をけふはかはるしるしにも御らんせられになん御前わたりにもかくどきいえさせ給へこのみすのまへもならひ侍らねははしたなく思ひ給ふれとかくこんのうすさにけふはかりはなくさめ侍をいまよりのちそうらみ申へきとてたち給におきのはかせあららかに吹うこかしたるににわかにみすをたかく吹あけて木丁もたふれぬれとみになをす人もなしあなわひしれをみたまへといひつゝわれくはきぬを引かつぎつゝひとつにまろかれあひたるをのとくとみいれ給へれはかうそめのにひ色のひとへくれなひのはかまきは（60オ）」みたるをきてひるねしたりけるか人々のさはくにおどろきてあへなくおきあかりたるをいとよく見あはせたるあさましきにやとみにそむきなともせずあきれたるかほいとをかしけなめりこちなのわさやとは見えなから女はうのけはひとよりはこよなくみつへかりけりとおもひまし給ぬかのせうとのかこちけんゆへにや少将にそよく似たりけるとのゝ御子とはいふへもなかりけりとみるにたゞならすや思ひ給ふらんやうのものとあやしの心やと我ながら心つきなしじしろからくして木丁なをしつれはたちのき給（60ウ）」ぬ又の日とのゝ御まへにて昨日のことゝも申給ふつゆてにかのとうふんにはものしたりきやにしのたににすむなる人をこそまたえとふらはねいかやうなるけし

きにか見ゆるとの給うちへ有さまのいとあやしきを子ながらもいかに見給ふらんと心はつかしうおぼすなるへし木丁のほころひあらそひしきかけともおもひてられ給ていとをかしうねんするけしきやしるからんうちわらひ給てよしなきものあつかひこのみ給ほとにたかためも中くなることやとこそ見ゆめれとし比もかういふ物ありとはきくしかと(61才)おぼえぬことなれはかやうの人のすくなきくさはひにもとりいてぬをなにのたよりにかくもありそめにけるにかいとありつかすやとうめき給もけにときけとあさましとあきれ給へりしかほはさすかにくむへうもなかりつれはつれくにおぼしめさんたこと人よりはなとてかあしうも侍らんたしかなる名さししてさすらへたまほんもいとをしう侍るへしとその給いさやかういひそめけんもおぼえなくそあるやよめに見しかは宮の少将にそいとよくにたりしせうとのしれものあんなりそれはかの宮の御子とそいふなるこれも(61才)さるへしなとの給まことかのあすかるにめのとみないてたちて君をはとむるをたれもいかにしてかはあらんとなくくしたまひきこえ給もことはりにいとをしさりとていまは我どまるへきならねはわりなきよしをいひきかすれはさはわれもいてたつへきにこそと覚したつに人しれぬ音をのみ鳴て思ひなけきたるけしきふとおしきをみるにさらはなにかはくたらせ給京もたよりなくてひとりとまりたまはんこそうしろめたう侍れ又われもいかてかともおほさぬ女は千人のおやめのとやくなし御おとこをはせぬほとなりまして(62才)かくやんことなきたのもし人にもおはすなり御心さしもねんこなるめるをひきはなれてあつまちに立そひ給はんいとあたらしうかたしけなしなとさすかにあるへきことをはいひながらいかに思ひかまふることにかあらんこの人をはするよるあかつきのかとをもこゝろやすからすかきうしなひかちにちてなしてつるやくけはひを御どもの人々きてめさましくあさましきにふみこぼちてこらまほしきおりへありけり

殿にも忍ひてたれと思ひ侍るにかかくなと申せは女のけしきのあやしきもこのほかけのおい人のな(62才)をありしきのりのしにとらせんとするなめりさやうのことひえいてむすほれたるなめりと心え給にいとつつきなくゆくしけれと女君の有さまのじてやされはとてやむへくもおぼされねはしらすかほにうせまかせたらんもうしろめたくいかにせましさふらふ人々のつらにてやつほねなとしてとおぼせとさりとてもいてへあつかはせ給はんことひとへかりおぼく人しれす思あたりのきく給はんにたはふれにても心とむる人ありとはきかれたてまつらしと思ふ心しふかけはさてもえあるましさらてはさすかにこゝかしこともてあつかひ(63才)給はんもいかにそやおぼされつへ今をのつからわれとしりなはえいとはしかくろへぬへき所もあらはありさまにおい人のにくむしたかひてなとおぼすなるへし女君にもまろいとふ人のあるなめりなことはりなりやたのもしけなりしりのりのしを引たかへてかくものはかなき身のほとなれはをとなしのさとたつね出たらいさ給へよわつらはしき人のさすかなるかあれはしはし人にしらせしと思へはかくおぼつかなくあたなるものに覚したるもことはりなりわれはなに事にてかあなかちにしられしともおぼさるへきいひしらぬしつのめ(63才)なりとも是よりかはる心はあるましき物を猶たのむ心のなきなめりとうらみ給へはさそふ水たたあらましかはとものあはれに思ひて猶別当の少将とおもはせ給へるなめりせいする人のありとの給ふはとおもふにもうちたのみて行かたをも思ひとむることあるましうおぼえなからいとかくめてたき有さまにてなつかしうあはれにかたらひ給を行さきのめやすからんにてたにいかへはれならさるもりのうつせみとなみたのおちぬへきをまきらはしたるけしきふとらうたく心くるしけなりかくいふほとこの女君たへならすなりに(64才)けり打はへてものをのみ思ひてありしさまなるけしきにもあらぬをたゞ誰もこのじてたちを思ひなけり

き給へるとおもふにのとみしりていてあないとをしやかくさへならせ
給にける物をいかへせさせ給はんする君になをきこえあはせさせ給て御
けしきにこそはしたかひ給はめたれなりともかくなり給へるときへ給て
はよもあたへしくも思ひ給はしといへとたへいかなりともたのむへき
ありさまならはこそあらめさらはともみえぬ山ちのみこそよからめとい
ふ物からかうさへなりにけるを露しらせたてまつらてやみなむことなど
いみしうおぼゆれとかけ（64ウ）」てもましてひにいつへきならねは日
をかそへつゝなきなげくよりほかのことなしこのとの御めのと大二の
きたのかたにてあるなりけり子ともあまたあるなかに式部の大輔て来年
つかさうへきかかやうの人の中には心はへかたちなどめやすくてすき
くしう色このむありけりいかなりともかたち心すくれたらん人をみん
とてめなともなくすくすにこの女君うつまさにこもりたりけるをのそ
きてみて思ふさまなりければせうそことなものせしかと身つかはぎ
もいれぬにこのめのとはいとみつつきにおぼえけれど、いまかくたの
む人にてあるそつといひち（65オ）」きりたれはえいなむましくてたち
まちのことうけはせねどつかされてくたり給はん折はざりやあらんなど
ちきりけるにかくこと（も）たかひて身はいとたよりなしなまきんた
ちのかくろへて時々よなへおはするはいとふさはしからねはあつまお
とこにやつきていなましとおとすなりけりされと式部の大輔のおやのと
もにつくしへくたるに思ふさまならん人もかなるてくたらむとせうそこ
いひおこするにいとおもふさまなる心ちして別当の御子の少将なんかよ
ひ給へはさらてもやどあるましきさまにきこえさせとまことにさもお
ほさはひめ君にかくとははらせたて（65ウ）」まつらしくたり給はんほ
とにもかへ給へといひけれはいみしいうよろこひてさやうのほそきんたち
のかけめにておはせんよりはたゞ心み給へをもとの御さはひにてこそ
はおはせめなことよくかたらひてひてたちの物などとよけにおこす

れは心ゆきてかみしもの人もとめあつめなどしけるをかけてもしる人も
なかりけり式部大輔のもとよりはくたりもちかくなりぬるをたかへ給な
と日々にいひおこすれはたゞあなかまくしよもたかへきこえしその
か月に御くるまをたへさりけなくてふとわたし奉らんといひやりつゝ心
のうちにはみないてたちたり（66オ）さて君にはあつまへのいてたち
とまり侍りぬたゞならすさへおはしますにひと心くるしうこのことは申
はなちてやりつるなりいまはいかにもおはしまさむをみたてまつりてま
かるへきなめりと心ゆきたるさまにていへは女君はまことへ思ふにす
こしおちるたまひぬ打はへ心ちさへなやましかりつるもをしからぬ身は
いかにもなりなはやといそかれつるもかくなりにけりときへあらはして
はあはれなりけるちきりのほとさへおもひしられてうき身とおはれつる
はすこしいたはしう思ひなりぬるもあはれなりいのちたへすなりて御心
のほと見はて（66ウ）すやどこまより心ほそくおもふへしのわきたち
てかせの音あららかにまとうつ兩も物おそろしうきじゆるよひのまきれ
にれいのしのひてまきれいり給へりいつもなよへと忍ひやつし給へる
に雨にさへいたくそぼちぬれにほひはかりはいと所せきまでくゆる
みちたるをとなりの山かつともあやしかりけりつねにあざやかならず
打とけたるよひのころものであたりもかやつなるは見ならひ給はぬさへ
なつかしく心くるしきけそひてあはれはをろかならすかやうのありさま
はまたならはさりつる人やりならぬわさかなとてぬれ給へる御そときち
らし（67オ）てひまなくうちかさねても心より外にへたて（つ）るよ
なへもわりなきをさは思ひ給やかはかり人に心とへむる物とまたこそ
しらさりつれなどつきせずかたらひ給さまあはれにて
逢みてはそとのぬれまさるさ夜ごろも一夜はかりもへたてすもかな
わりなき心いられなとはひつならひけるそとよなどのたまへは
へたつれば袖ほしわふるさ夜ごろもつるには身さへくちやはてなん

といふも物はかなけなりよしみ給へよ世のためなさこそけにうしろめたけれどなこりなき心はへなとはいかなる人のつかふわさにかなとの給をもなをさりことへも(67ウ)「あなたちにたとらすうとくしきさまにもあらす心のうちやいかならんめのまへはたゞおなし心なるさまにもてなしてかくさたかにいひしらせ給はぬをもとやかくやとあなたちにもたつねしらす又わか身の行為をもさりとてはぬものからなよくと打なひききこえたるさまなどあやしうさまことにらうたけなるをみづくまゝにかきりなき人々の御有さまにもをとるましくてわするべき物ともおほさざりけりれいの夜ふかく帰り給てわか御かたに打ふし給てすこしまどろみ給へる夢にこの女わかかたはらにあると思にはらのれいならすふく(68オ)らかなるをこはいかなるそかゝることありけるをいまゝてしらせたまはさりけるかゝるちきりなりければ何か行すゑもうたかひ給とて夢のうちににもいとあはれと思に女

ゆくゑなく身こそなりなめ此世をは跡なき水をたつねてもみよといふと思ほとにとのゝ御かたよりあすはかたきものいみなりけるをわすれさせ給へるかあなかしこへとより御ふみなととりいれさせ給ふなどのたまへるにふとさめておねのさはけはをさへてうけたまはりぬるよしきこえ給へと心さはきしてあやしいかなことそまことにれいならぬことやあらんと(68ウ)いまそ覚しあはすることも有ける心ほそけなりつるはいかなるへし(き)にかあらむなどつねよりもおほつかなくゆかしきに夕さりはえおはすましければこまやかに御ふみかき給つねよりもいまもみてしかなとなんよさりはかたき物いみなれはすさましうなん

あすか川あすわたらんと思にもけふのひるまは猶そ恋しきまこととくかたりあはせまほしき夢をこそみつれいと心もとなくなとこまやかれと御かへりことはたゝ

わたらなん水まさりなはあすか川あすはふちせになりもいとすれそ

のわたりとなくすさひ(69オ)かきたるもさうなとわさとよしとなけれとなつかしうをかしきさまに見ゆるは思ひなしにやかしこにはつくしの人あかつきになんゆめへたかへ給ふなどいひければたゞあか月にさりけなくてくるまをふとよせ給へたかふといふことはあなゆゝしといひやりて女君のひとりなかめふし給へる所にきてあすのまたつとめてこのにしに井ほるといふあるしもほかへわたりけりいかせさせ給はんするくるまのことをたれにかいはましあはれかやうのおりにこそいきしは思ひ出らるれかくのみ世の中のたよりなきにこそおもはぬ山なくわりなけれいみしう思へと(69ウ)女は思ふことかなはぬかくちおしきそやかゝればえせ宮つかひ人は忍ひかたらひ人はまうくるそかしまことへかのするかゝめこそものゝなさけしりていはむことはきかんなどひしかいひやらんさてこのくら人少将とのゝ御めのとのいゑかりてしはしわたし奉らんなどてうことか待らん年比のいみしきしる人なりしをこの御こののちなかへいとつゝましくてをとつれぬをかくとやきゝたらむさるにてもあしかるへきことかはなどいひちらしてたちぬるをあなくるしありきもこりにしかはなにかつちひまでもありなんましてそのしらぬひとのいかてかとのたまへはあなまかくし(70オ)やたゞなる人たにもつちいまぬはあるものかまいてかくおはします人はあなおそろしといふよろつよりはかの少将と思ひていかなるひかことかいはんとすらん夜なくの月かけもつねにまへわたりし給ふ御ひかりにみあはすればたかふへくもなきものをものくるをしくよしなきこといひ出てやとかめん程いかに見くるしからんとおほせとせちにもいかてかの給はんあはれに物はかなかりける有さまのみ思つゝけてかうまでもさすかに見え奉るちきりはあさからすわれながら思ひしらるゝをこのことまことにさもあらはさりともおほしかすまへ給やうも有なんかしの(70ウ)給ひちきりありさまもいつはりにしもあらすやなど身もすこしいたばしくなりに

たるをこのたのもし人の心やいかにもてなしはてんまたわが身を何とかはばかりの御有さまになからへて思ひかすまへ給はんつるにはいかやうにならんなど身のはてのはかくしからざらん物ゆへ行きのあらまことに袖もぬれて源しの宮の御かたへと思ひしもかやうの人に見え奉らんことはつかしさに思ひたゞなりにしをけにかうをもはするさまたも見え奉りけるいまはまいていつくにもくさやうのすちなと思ひかくへきにもあらすかしなといひくつてのはてく（71オ）は山なしだうしろめたく心ほそく思ひつゝくるにおそろしきことなんなるつるてにしなはや世にあらすなりなんことのみこそ人をも身をもうらみはてすしてはやまめなどくへときしかた行すゑ思ひつゝくるに枕の下はつりもしつへくなりぬめのときてよろつの物とりしたためさるへき物はぬりこめにをきなどしつゝ京のうちは一夜はかりとおもふましきものそやまいてこの井は五六日にもなりぬへかなりつゝなとたんまでこそおはしまさめぐるまもありかたきにたひくありかせ給はんもうるさからせ給めるになといへは君このの給へる所へかそれならは猶（71ウ）ましどこそ思へしらぬ所にいかてかさてはあらむとの給へはさおほしめさはときはとのにわたらせ給へといふは故中なこんのりやうせしにし山のわたりなりけりいさまたそれもひんなしつちをいましと覚しめさは御心なり女か申さんことははかくしきことあらしとくおはしまさんおりの有さまをもさすかにそれまでいきて侍らはあやしの女のみこそみたてまつりあつかはめとおもひ侍るかいとまかくしきそやさらぬたにこそいうむところにはとくうといふ物はかならすいてくるそかし御いみはうたてさへあるよこのたの（72オ）もし人の御心はへさやうの程とてもかひくしくもてあつかひ給へうこそみえ給はねいひおもへは女のくにてそ侍らんかやうのきんたちはおやなどの立そひてたのもしきわたりにたにすこしもうしろみやめはうちすて給ひついでやまいてなにのかす

とか思ひ給はんあなおこかましや又御こゝろさしあらは所かはるともおはせさるへきことかは恋こそみちのといふなれとさすかに打わららひていふかくほかへいきにくするはこの人によりいふと思なるへしと思ひ給ていてそのことだあらすやあやしき有さまなれ（72ウ）はありきも物うくおほえしをいとくいさや物こりしてとの給へはさてそれはあしくやは侍るされはこそかゝるさいはひも御らんすれかしこはわかき人のおはしかよはん中くをかしかりぬへき所なれは打忍ひて二三日おはするやうもありなむなにかしそれがしとくめてはへれは御使にそくとをしへ侍りなんおはしましたらんにもよくへあむない申せよといひをき侍りぬなととくむるすんさ《けすイ》ともよひたてくいふもいとくかたはらいたければさまでたつぬる人もあらしといとくおほつかなき物にの給を行ゑなくむかし物かたり（73オ）のやうにことさらめきてやおほされんまことにかくときこえはやとおもふにむ

かはらしといひししるは待みはやときのもりに秋やみゆると思とかへる山のとありし月かけはこの世のほかになるともわすれ給ましきをいかにしなしつるそとあやしう心ほそくて火をつくへとながめてなみたくみ給へるまみのけしきのいとらうたけなるをめのとさすかにみおこせつゝ心もしらぬ人にうちまかせきこえてはるかなるほどにひてたちたまはんはくちおしき御さまかなど涙くまれりあか月にくるまのをとして門うちたゞく（73ウ）なれはいてあはれ人のためにま心なるするかとのうへかなあまりとうなづく給へるよとひきいるゝをきくにもむね打さはきてあすか河こゝろもとなげにの給たりつれはよさりなとはれいのものし給はんにいかやうにいひてかかへり給はんなど猶ものうきもうたである心かなめのとの物いひもはつかしなからおほつかなくとものしなんことはくちをしく心より外の身のあやしきなれはとまつ思ひつけられてうこかれぬをつまとをしあけてさらばとくわたらせ給へ人のい

そき侍るにひさしくならんもいとをしとひてあさやかな（74オ）」る
きぬとももてきてくしのはいやうの物などくるまにとりいれなとしてたゞ
いそきにいそきてをそしへとおしじるやうにすればわれにもあらて
るさりいつるもなことおもひわくことはなけれど心さはきしてむねつと
ふたかりたる心ちすとりもいまとなくなる

あまのとをやすらひにこそひてしかとゆふつけとりよとはゝこたへ
よ猶たゞいまなとはきこえまほしきにとみにものりやらす涙せきやらぬ
けしきなるをましていかにとみちのほとの有さま思ひやるにめのと又人
ひとりそしりにのりぬるかとひきいつるよりやなくひな（74ウ）」とを
ひいひしらすおそしけなるすかたしたるものとも数しらすおぼくて火
はひるのやうにともしてあけはてぬさきにとくくといふけはひともあ
やしうものおそろしきにこはいかなることそとたゞかきくらす心ちすれ
はきぬを引かつきてふしたるにかの行かたしらぬとありしをきゝはしめ
たりしより打はしめ月ころひひちきり給へりしけはひ思ひ出られてわか
身はいかに成ぬるにかと思ふかいみしきによとゝいふ所にいきつきぬれ
はふねにのせんとてのゝしりあひたるにされはこそときはにはあらさり
けりとと思ふに物もおほえ（75オ）」ねとめはみゆるにやきしにふねよせ
てのせうつさんとて年廿ばかりなるおとこのそゝろかなるさまかたちな
るいといみしう心行たるけしきにもてなして大二殿はいまはとりかひと
いふところまではおはしゆらん中なこんとのゝ御ものいみのかたよ
（か）りつれはとみにもえひてゝをくれ奉りぬるよ御きそくのよろしか
らさりつれはひとまもえ申いつましきなめりと思ひつるにかうみやうの
御むまをこそたまはせたれなどひてをくりの人々なるへしおなしほと
なる人々とむかひるてえくちのわたりのせうえうはこのたひはふような
めれ（75ウ）」は大武殿のいそき給めりなとほこりかに打わらひたるけ
しきのつきへしさに物ならん行幸賀茂のまつりにけひるしのへたう

のしりにこそかやうのおそろしけなる物さゝけなどしてあるものこそかゝ
るかたちはしたれみるたにうとましきくるまにきてさらはとく御ふねに
たてまつりねとてかきいたきてのせうつすほとの心ちいかはかり有けん
めのと心ゆきたるきそくして物いひゑわらひなどするもねたうかなしと
はよのつねなりいかなるものゝひつれのせかひにゆて行にかあらんとす
へてひやるかたなきにおきはしりて河にもお（76オ）」ち入なはやと
おもへとたゞいまおとし入て見る人あるましければかしらをたにさしい
てすひきがつきて物したりおとこそひふしてえもいはぬことをいひなく
さむれはいとゝなきまささりてあやにくなるけしきなればさの給ふとも
たけきことよもおはせしと思へはひとおこかましやなにかしの少将のか
けめにてみち行人ことにこゝるをつくしむねをこかし給はんやはあやし
くとも又なく思ひかしつききこえんをとりとこにておはせ【か】しなま
きんたちは中中心ちあしき物そ殿のおはしまさんかきりはをのれらをそ
のきんたちはえこそあなつら（76ウ）」さらめさはかりの少将にならん
とおもはゝなりぬへしよしみたまへよらひねんは帰のほりて五位の蔵人
になりてそのぬしといつれかまさりたるさなりひてゝみせ奉つらんくち
おしうほいなしとおほすともいまはいふかひなればたゞおひらかにも
てなしていとしなくしからぬやうにても御心にあかぬことなくやすら
かにてすぐさせ給へきむたちならすとてをのれをわろき物に人思ひたら
ねはかやうに女にまたこそくみならはされぬ御まへたちよりもまさり
てやんことなき人たちわれもゝといひ侍つれとうつまさにて見奉りそ
（77オ）」めしより思ひしみにし心のなをりかたてかくめいほくなきこ
とをみ侍こそ猶これ申なしし給へなどいひあたふかつき給へるきぬをせち
に引やりて見るにほのかなりしよりもちかまさりしていとらうだけにを
かしけなればうれしくていかてとく思ひなくさせあかぬことなくか
しつきてみんと思ひけりおとつれへなりしなりなくそのわたりの

ものともどきあつまるをもであつかひたる心ちいとうれしくおもふさ
まなるにこの女君の御有さまのいとあきたくあやにくなるをいかにみ給
らんさはかり我もくとむこにほしかりし人（77ウ）」をすてゝかゝる
御けしきをみ給はさるはひとこそおほすへけれあらみさきといふものは
なたぬ人はかうこそあなれよかるへき」とはあしくそおほゆなるなど人々
いひてなげくをきゝておとゝたにもさしいて給へやかくこそ心うき御心
ならんすらむとこそおもはさりしかほいなきやうにはいかておぼさゝら
んさりとてもあまりあやしやとてものしけなるけしきなりかはこなとや
うの物あけさせて人々のえさせたりけるあふきたき物などとりいたして
はかくしからねとある人々にものし給へかゝる人をはすべしともしら
せざりしにいかてかしりけん忍ひて人いてくなり（78オ）」とてそれか
しかれかしなといひてとりちらすなかに女のさうそくのことなるかあ
るを中なこんどのゝたれとはしらねとるてくだる人にかならすさせよと
て給はせたりつる御心さしのまゝにたてまつり給へ御涙にいたくしほれ
ぬめりなといふをけになへてならぬ色あひにこそ侍けれなどめてゐたり
又この御あふきはもたせ給へりつるをあたらしきよりはと申とりたりつ
るをはつかしき人にもこそあれいたうしほれたりとておしませ給つれと
かたみにみよとの給はせつるはかなくうちもたせ給へるかやうの物さへ
そなへての人にはにさせ給はぬやなどいふをきくにも（78ウ）」これは
さはうつまさにてもきゝし物にこそあなれこと人にてたにあらてあな心
うの身の有さまやとおもふにいとかなしくてなきるたるにこのあふきを
さしよせてこれ御らんせよやいかにしてひともしもみはやと女のかき
もくたれるも心をつくしさはく御てよこれみ給てはまろかにくさもなく
さみ給てんといふをまことにわかみしをなしてにやとゆかしきに人めも
しらすおきあかりてみつへくおほゆれとかほなどのあきらかにみえぬへ
ければ猶なきふしたるをわか君をこそかやうにいのちにかへて恋かなし

まめそのあをひれおといだよりていのちたえぬへく（79オ）」見え給こ
そかへりては心つきなけれ何ことをさまでは思ひ給そまろかかほはそれ
にやをとりたりけるとみ給へくとあたへてきぬをせちにひきあけんと
するに神仏かゝるめみせてうしなひ給へとなきこかるゝさまのあまりう
たてけなればむつかりていてぬるまにこのあふきをとりてみればひと夜
もち給へりしなりけりうつりかのなつかしさはうちかはし給へりしにほ
ひにもかはらすさうにもまなにもかきませ給へるをなくなくみればわた
る舟人かちをたえと返々かゝれたるそのおりはわれとしりてかゝれたる
にはあらしをされとたゞいま見つけたるはことしもいそ（79ウ）」あれ
いかてかかなことおぼえさらんかほにあてゝながるゝさまゑもみなおち
ぬへし

かちをたえいのちもたゆ《たえぬ》としらせはやなみたのふちにじ
つむ舟人

そへてけるあふきのかせをしるへにてかへるなみにや身をたくへま
し

なとおもひつゝけらるゝにも物のおほゆるにやとわれながら心うしあす
か川のわたりをなけき給へりしおりかゝらん物とはおもはさりしにけさ
も御ふみ有つらむかしいかにいひてかへしつらむ打きゝ給ひていかにお
ほしつらんと思ひやるはいかゝはよのつねの心ちせん（80オ）」

うみまでは思ひやりしあすか川ひるまをまでとたのめし物を心え
ぬ夢とありしはいかなりけることにかきゝたにあはせてやみにしいふせ
さをいかにせんとなきこかれてもあまりそあるかくれいならぬ有さまを
いかてしらせたてまつらしと思ひけんさらはすこしあはれとはおぼし
なましとおもふにもうちかへしもしげのち思にかなはてながらへは行す
ゑにきゝあはせ給ふやうもあらはさてこそあむなれときかれ奉らんもい
ますこし心うかりなんかしなどしらぬあたりの物にてたにあらてかく

したしつてきゝあはせ給ふへかりけるゆ (80ウ)」かりにしも有けんとをき程までいきつきてこのありさまみあつかはれぬさきにたゝいにしてもしゆるわさもかなと思へはかくて四五日にも成ぬれと水などをたによせすめのとはきつゝよれつにいへといとかく心うかりける心をしらてとし比おやのおなしことに思ひたのみでくしくけるさへくやしく心うかりければかなしくつらくてきゝもいれられすたゝ引かつきてなきふしたりおとこもしはしはいかて心ならぬことなれはひんなしとは思はさらむさのみはあらしさりともとおもふ程にかくいとあさましくていのちもたえぬべきまなればかくまで思へきことかは (81オ)」とあやしく心つきなくおほえてあやにく心もつきまさりてとかくひきうこかしうらむれは思ひわひてをしはかり給めるやうにいとかくおもふへき身のほと有さまならねはひんなしなじにはあらすむちのれいならすのみありしかしと、まさりて昨日けふはいと、なからふへき心ちもせぬをいまはいかにも御心にこそあらめひとかうおほゆるほとをすくし給へ人けちかきはいと、くるしうのみおほゆるはいかになるへきにかとてなくけはひなとけにたのみすくなけにきえりいぬへきけしきなれはたゝならぬ人はつねに心ちなんあしくするときくはさやうのにてかゝ (81ウ)」るにやいとかく物などもくはてさやうの事なんいとあしかんなる物をなきすかにいとおしくていたうもあやにくたゝてひとひもなみにとすさひにたるあいきやうなくゆゝしくたひそうともにいのりせさせなとよろつにもてあつかひフヌはひよりてとさまかうさまにうらむるを聞たひことにいかにせましかくうきをしらぬいのちなかさにてはつるにいかになりなんと思ふにすへきかたなけれはこのうみにやおち入なましとおもひなりぬきやつには夜もすかられいよりもおほつかなくおもひあかし給て又の日はいつしか御ふみつかはしたるに門もさして人の音 (82オ)」もせねはあやしうて猶たゞけはいみしけなるけすそひてきたるとへはしらすたゝよへこの

とのにはやとり侍しなりつぐしの小武と申人のたちぬる月この殿はかひ給ひしなりいまあすそわたり給ふそれやをはし所もしり給らんをのれはたゝ人たち給なりこよひいけどありしかはまうてこしとへはかくすなめりないまはさてそやまんなどおとして (を)きてとなりの人々にとへはたしかなることいふもなけれはまひりてしかくと申せはいとあさましくあへなしなともをろかなりいかにもめのとのしつることにこそあらめ身つからる心には何事のつらさに (82ウ)」かはたちまちにゆきかくれんとも思はんいみしくともわか心とはさやうにはあらしと見えし心さまをたのみていまゝてかくてはをきたりつるそかしたゝありしほうしのとりかくしつるならんかしいかはかりねたしと思ふらんとしらぬにはあらさりつれとかくもてさはかんもさすかにいかにそやおほえてかくしなしつるもあまりなるわか心のたゆくしさそかしすはふちせだとありしもいかなるけしきを見てかいひたりけんと思ひつゝけられ給にいみしうくちをし何事もたぐひなく有かたうめたかりしにはあらてたゝなつかし (83オ)」うあはれと覚えつれはたちまちにみしとまではおもはさりつるにかく行ゑなくなしつるよとおほすもむねふたかり給てつぐくとなかめくらし給まことしくやんことなきはにこそあらさらめさるかたなるしたくさのよすかの露ともなくさめぬへかりつる物をさまことに物をそろしけなりしものゝなれよらん有さまをいかはかり思ひなげくらんとねたくゆゝしうもさまくに覚しやるに人わろうごひしうも思ひ出られ給てよるもまとろまれたまはず

しきたへの枕そうきてなかれける君なきと (83ウ)」この秋のねさめは何事よりもかの夢のおほつかなさをいかにとたに聞あきらめてやみぬるはいといふせくおほつかさもよのつねなりいつれにてもはかくしき人にはあらしをまことださることもあらはなれかほにもてなしてあらんこそ心うくかたしけなけれましてとし月へてかゝみのかけもかはらぬ

さまでいひしらぬものゝなかにおひいてたらんにいてやかゝれはこそよからぬふるまひはすましきものなれすこし人數なるものゝかう跡かなきやうやはある何かはあなちにおもひかすまふへき世にさることもあらしとしぬ（る）であ（84才）さきかたに覺しなせとよつよりも猶おほつかなきかたのことはむねふたかりてあつまのかたへなときゝしはもしさもあらはふせやにおひいてんさまなど御心にかゝりて我御すくせのほとくちをしくおほさり

そのはらと人もこそきけはゝ木ゝのなとかふせやにおひはしめけんつねに心ちよからぬ御ことくさにならひたるなかにもこの秋はむしの音しけきあさちかはらにことならすなきくらし給つゝもひるはをのつからまきれ給を心のつまとかやいひふるしたる夕くれのそらきりわたりてありかさためたる雲のたゞすまひ（84ウ）うら山しくなかもやられ給にしの山もとはけにおもふことなき人たに物あはれるへきにかりさへ雲ゐはるかに鳴わたりて涙の露もさかり過たるはきのうへにたまとをきわたしつゝ鳴よわりたるむしのこゑくさへつねよりもあはれなるにさへちかきすいかひのつらなるくれ竹おきの上かせなにときゝわかれぬむしのこゑく木からしに吹まよはなれたるは涙もとゝめかたく身にしみて心ほそくきこゆれはすたれをすこしまきあけ給へるに木々のこすゑも色つきわたりてさとふきいれられたり（85才）

せくそてにもりてなみたやそめつらん木すゑ色ますあきの夕くれタくれの露吹むすふ木からしや身にしむあきのこひのつまなるなとさまく恋わたり給て涙をしのひ給てつきのをかしけさはたゞかはりをさいはひにてこのよの思ひいてにしつへしとて（そ）みえける雨さへすこしふりていとゝきりふかく見えわたさるゝ空のけしきはまことに物みしりたらん人にみせまほしけなりまたこれりやうふうのゆふのてんの雨とくちすさひ給へるなとしつむ舟人なきこかるゝもことはり

なりかしかの舟に（85ウ）は日かすのつもるまゝに心ちもまゝにあるかなきかになり行をかくてしなはむなしきからをこれかれにみあつかはれんもねたくくちをしきに猶いかてうみにおち入なんと思ひてさるへきひまを見るにさすかに人めのみしけくて日ころに成行にこのたひふよろつにうらみつゝ衣のせきをうらみわふれとおなし事をのみなこやかにいへはさすかになきけたつ人にていとよはけなるさまを心くるしく思ひつゝちかくもえよらざりけりかゝる程に大二の舟にやんことなき人のなへての女にはにぬかましりたりけるを心かけてかたらひありきけりよひ過るまでみえぬをう（86才）れしと思にかゝることをきゝてめのとはいとやすからすはらたゞしきにもきみのかくしつみふし給へはそかしれいのやうにておはせましかはかゝることながらましと思ふにもいとゝ心うくつらくさへおほえてをのか身をとさまかうさまにせためなし給よかゝる人の物いたぐおもふはいみ侍なりのちあらはわすれかたくおほさむ人にもあひみさせ給なんいとかく心おさなくいふかひなき心はいかなる人があるなどいみしきことはりをいひきかすれとたゞこの大ゆふかみえぬおりくいてくるを我おもふことはかなふへきなめりと思ふよりほかのことなけれはいてあなあはれにまかせてもみてあ（86ウ）あなかちに身をもてなしてうきめを見すればそかしいかなる有さまにてなからへんとすらんなどさすかにあはれにかなしくおほえ給へはいとゝねをのみなきていらへをたにし給はねはうちむつかりてたちぬるまにかしらもたけて見わたすに人々ねたるさまなれはうれしとはよのつねならす思ひながらこよひやかきりならんと思につらからん人たにおもひいたされぬへしまいてわれや忘るゝ人やとはぬと思ひしはおこなりけるわざかなと思ひつゝきたちぬれは涙の海に身はやかてうきいてうこかれすおきのかたのつまとをしあけてつくへとみ出せは空はいさゝかなるうき雲（87才）もなくて月のかけさやかにすみわたりたるに山ははるかにうみ

のおもてきしかた行きとも見えすはるへと行きもはてもしらずよせ
かへるなみはかりとみえて舟のはるかに「きゆくかいと心ほそき」ゑに
てむしあけのせとへこよひとうたふもいとあはれにきこゆ

なかれても瀧ありやと身をなげてむしあけのせとて心みんとて
もかほに袖をゝしあててとみにもうこかれぬほとに人やみつけんとしつ
心なけれはわなゝくくひとへにはかまはかりをきてかみかきこしなと
するにありし御あふきの枕にありければ手にさはりたるも心さは (87ウ)
させられてまつとりて見れば涙にくもりてはかくしくもみえすすみの
つやはかりそきらゝとしてたゞいまかき給つるさまなりさしむかひ給
へりしおもかけさへふと思出らるゝにこの世にては又みたてまつるまし
きそかしたゝいまかくなりぬともしり給はていつくにいかにしておはす
らんねやしたまひぬらんさりともねさめにはおほしふらんかしたゝな
とひとつことよりほかに又なき心まとひなり

よせかへるおきのしらなみたよりあらはあふせをそいとつけもしな
ましすゝりをせかひにとりいてへこの御あふきに物かゝんとするためも
(88オ)「きりふたかりてとみにもかゝれす

はやきせのそこのみくつと成にきとあふきのかせよ吹もつたへよと
もえかきはてす人のけはひのすれはとくおち入なんとてうみをのそぐに
いみしうおそろし (88ウ)」